

---

# バカとリリカルとゴッドイーター

夜叉龍

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカとリリカルとゴッディーダー

### 【Zコード】

N1971T

### 【作者名】

夜叉龍

### 【あらすじ】

やつちまつた感120%！。でも後悔はしません！。「ゴッディーター」のキャラが！。リリカルなのはのキャラが！。明久達Fクラスの面子とどたばたやつちやいます！。ちなみにカツプリングは明久×瑞希。明久×美波ではありません。これらじやなけりややだ。つて方はバックしてください。

## 1問 2組の幼なじみ（前書き）

はじめいつも夜叉龍です。やつちまつた感半端ないです。

ちなみに更新は亀です。感想お願いします。ではー。

## 1問 2組の幼なじみ

文月学園 一 科学とオカルトと偶然というわけの分かんない理屈で生み出された試験召喚システムを取り入れた学校。

その校舎へと続く坂道の両脇には新入生を迎える為の桜が咲き誇っている。

その坂道を3人の男女が歩いている。

「ふわあ、眠い・・・。」

銀髪まじりの肩より少し長い黒髪をした少年一 青葉 空が眠そうに欠伸をしながら歩いている。

「新学期前日まで夜更かしするのがいけないんでしょうが。自業自得よ。」

肩にかかる程度の長さの髪をした少女一 木下優子があきれながら言つ。

「空にも困つたものじゃな。大方ゲームが区切りよく終わらなかつたんじゃない?。」

独特の言葉使いをした優子に瓜二つの少年で彼女の双子の弟一木下秀吉が苦笑混じりに言つと、

「そなんだよ秀吉。昨日パーティーのみんなが放してくれなくてよ。まあ、おかげでアルバ リオンを結構討伐できたからいいけ

どな。」

空はからからと笑いながら返した。

「はあ、全くあなたは?????????。」

優子はかなり深いため息を吐いた。

-----

「おはよう、木下姉弟、青葉。」

登校してきた3人に挨拶したのは浅黒い肌に短髪そして筋骨隆々とした男西村先生である。担当は生活指導。

「おはようござります。西村先生。」

「おはようござります。西村先生。」

「おはようござります、鉄?????????西村先生。」

「また青葉。お前今鉄人つて言おうとしたか?。」

鉄人とは西村先生の生徒の間でのあだ名のことである。その理由は趣味のトライアスロンと冬でも半袖で「る」とから来ていい。

「気のせいですよ、西村先生。ふわあ?????。」

空はまた眠たそうに欠伸をした。

「お前は?????。新学期初日からそれでどうする。」

西村先生が呆れまじりに言つて、

「すいません。後でアタシが言つて聞かせます。」

優子が謝り、秀吉は苦笑を浮かべている。

「はあ、まあいい。それよりほら、お前達の振り分けだ。」

西村先生が箱から封筒を取り出し、3人に1つずつ渡した。

「むう、わしはFクラスじゃ。」

秀吉が自分の封筒の中身を見てうなつた。

「アタシはAクラスよ。まあ、当然ね。?????????????。」  
空は?。」

優子は自分の結果に満足そうに頷き、そして空にふつた。その日は同じクラスになることを期待しているように見える。

「ん。」

空が突き出した紙に書いてあったのは、

の文字だつた。

「「な、なんで（じや）！？。」」

優子と秀吉が全く同じタイミングで叫んだ。それを見た空は双子のなせる技だなあ、と全く関係ないことを思った。

「な、なぜじや！？。なぜ空がFクラスなのじや！？。空の実力なら最低でもBはいくと思うておつてたのに！」

「確かにそうなんだけど?????????。」

空が気まずそうに頭を搔いていると、

「空。まさかとお思いなさうだ、寝落ちしたんじゃないでしょうね。」

優子が半眼で睨みながら詫うと、

空は力無く笑うと肯定した。

「やはりか。

秀吉はやれやれと言わんばかりにため息を吐き、優子は頭を抱えている。

「3人共いつまでもやつてないで早く教室に行つたらどうだ?。」

いつまでも動かない3人を見かねたのか西村先生が助け舟を出した。

「それもそうじゃな。行こう姉上。」

「?????????ええ。」

「いや、優子、本物にじめん。」

そして3人はそれぞれ教室に向かつて歩いて歩いていった。

それからしばらくすると木下姉弟と空が歩いた道を4人の男女が走っている。????????全速力で。

「はあ、はあ、遅刻したらアキ君のせいだからねー。」

そう言つのは茶髪をサイドボニーにした少女ー高町なのは。

「だから」めんてー。」

そうなのはに謝つているのは同じく茶髪の少年、吉井明久。

「だ、だいたいなんで玲さんの古いセーラー服があるのー?。」

そう言つのは金髪を下ろした少女ーフェイト?ト?ハラオウン。

「知らないよ！。全部姉さんが持ち帰つたと思つたのに！」

「せやけどあつたやん！。ちゃんと確認ぐらいしといて！。とい  
うかちよつと取り出した時点で気づいて！。なんで3／1も取り出  
してから氣づくん！？」

明久の言葉に反論するのは明久と同じ茶髪の少女－ハ神はやで。  
この4人は小学校のころからの幼なじみだ。FFF団が見たら間  
違いない嫉妬に狂うだろう。

ちなみになぜ彼等が走っているかと言つと、遅刻しそうだからで  
ある。その理由はまずなのは、フェイト、はやてが明久を迎えて行  
つたが、明久は熟睡中。それを3人がかりで起こし、そして朝ごは  
んを食べ終えた後外で待つてたがなかなか明久が出てこず、様子を  
見てみると何故か彼は姉の吉井 玲のお古のセーラー服を取り出し  
ていて、それを3人で慌てて止めていたらこいつなつたのだ。

「遅刻だぞ！。吉井、高町、ハラオウン、ハ神。」

登校してきた4人に告げたのは木下姉妹と空の時と同じ西村先生  
だった。

「おはようござります。西村先生。」

「おはようござります。西村先生。」

「おはようございます。鉄????????西村先生。」

「おはようございます。鉄????????西村先生。」

「さて、吉井と八神は鉄人とおうとしなかつたか?。」

「氣のせいですよ。西村先生。」

「アキ君の言つ通り氣のせいや。西村先生。」

「ん、そつか?。」

なんとか「まかせたー、と2人は内心はあ、とため息を吐いた。

「それより普通におはようございますじゃないだろ。」

「あ、遅刻してすきません。」×2

「えーと????????今日も肌が黒いですね。」

「えーと……今日も暑苦しそうですね。」

「????????吉井と八神には遅刻の謝罪よりも俺の肌の黒さと暑苦しさの方が重要なのか?。」

「すいません、すいません。」×2

なのはとフロイドがペコペコと頭を下げている。

「まつたくお前らは?????????まあいい。それよりほ  
ら受け取れ。」

そう言つと西村先生は箱から4枚の封筒を取り出し、4人に渡し  
た。

「それにしてもどうしてこんな面倒なやり方でクラス発表するん  
ですか?。掲示板に大きく張り出しちゃえればいいのに。」

明久が素直に思つた疑問を口にした。

「普通はそうするんだがウチは世界的にも注目されているシステ  
ムを導入した試験校だからな。このやり方もその一環つてワケだ。」

ふうんと明久は頷いた。

「それにしてもハラオウンは残念だったな。ちゃんとテストを受  
けていればAクラスに行けたのに。」

「いえ、体調管理を怠つた自分が悪いですから。」

フエイトは封筒を受け取り、言つ。

「そつか。所で高町にハ神。なんか2人のテスト用紙は完全な空  
欄だつたんだがどうしたんだ?。名前すら書いてなかつたぞ。」

その言葉になのはとはやはては視線をさまよわせる。

「え、えつと?????????前日に一生懸命勉強やつてたらほぼ完  
徹になつちゃいまして?????????」

「えーと私もなのはちゃんと同じで?????????。」

「はあ。つまり寝てしまったのか。」

西村先生が深いため息を吐いた。

「ははは、まったく2人は????????。頑張るのはいいけど、ほどほどにしないと。」

明久は苦笑を浮かべながら言いつ。

その顔を見て2人は思わず顔をそらした。言える訳がなかつた。明久と同じクラスになりたいがために白紙にしたなど。

「あとそれから吉井。」

「はい?。」

「ここれは俺個人の意見だがお前のやつた事は人間として誇れるものだ。胸を張れ。」

「?????????はい!。」

明久は笑顔で頷いた。それを見て事情を知っているなのは達也笑顔になつた。

そして4人は封筒を開け中身を改めた。

吉井明久 Fクラス。

高町なのは Fクラス

フェイト？ T？ ハラオウン Fクラス

八神はやて Fクラス

彼等の最低の学園生活が始まった。

## 1問 2組の幼なじみ（後書き）

「パッティーテーのキャラオワシが出てね——！。次回は設定を  
書きます。

これも「パッティーテー」ぐらこみなさんに読まれたらいいなあと思  
います。ではー。

## 第2問 OHANASHIと自己紹介（前書き）

本当は設定に行きたかったんですが、ゴッティーダイナーのキャラがほとんど出てないのでこれにしました。これまでに無いくらい駄文ですがどうぞ！。

## 第2問 OHANASHIと自己紹介

「?????????何だらう、このバカでかい教室は。」

「教室をこんなに大きくする必要ないよね?????????。」

「だよね。もうちょっと小さくてもいいよね?????????。」

「格差社会が目の前にあるわ?????????。」

4人が去年ほどんど行ったことのない3階に行きます目にしたのは普通の5倍はあるうかというAクラスの教室だった。

4人は窓から中を覗くと教壇には知的美人を体現している女性一学年主任の高橋洋子が立っていた。

「あ、高橋先生だ。」

「やつぱりあの人人が担任なんやな。」

フヨイトとはやてが揃つて言つ。

一方明久となのははAクラスの設備に目を向けていた。

「ねえ、あれ！。冷蔵庫とエアコンが個人であるー。」

「ていうか何あの大型ディスプレイ！。それに天井ガラス張りだよー。」

そのあまりの設備に2人は度肝を抜いていた。

「私、Aクラスじゃなくてよかつたかも。」

フェイトがポツリとつぶやいた。

「かもね。フェイトだったら逆に緊張して勉強出来なくなるかもね。」

明久が苦笑をしながら返した。

「でははじめにクラス代表を紹介します。霧島翔子さん。前に来てください。」

「????????はい。」

名前を呼ばれ立ったのは黒髪を肩まで伸ばした物静かな少女—霧島翔子だった。

「ねえ、3人はあの噂つてどつ思つ?。」

「噂つてあれ?。霧島さんは同性愛者つていつやつ。」

「うん。それ。」

翔子は一年生の頃からその姿で多くの男子から告白されてきた。が、彼女はそれをすべて断つてきた。そのうち彼女は男に興味がないといつづつに噂されるようになつた。

「ちがうんじゃないかな。」

フヨイトが否定した。

「そう?。」

「もしかしたらずつと一人の男の子を想い続けているのかもしれないよ?。」

「そつか????????。もし、そつならその男の子は幸せだね。霧島さんみたいな美人に想いをよせられて。」

明久の言葉に3人はうん、と頷いた。

「それじゃあ私達も行こつか。」

なのはの声に3人共頷き、Fクラスの教室に歩き出した。

「アキ君。私達いつのまに山奥にきちやつたの?。」

「なのは。現実逃避したくなる気持ちは分かるけどちゃんと見つめようね。」

今彼等が目にしているのはとても教室とは思えない、それこそ山奥の山小屋のような教室だった。

「「J」れは？？？？？？Aクラスとは真逆の意味です」」  
「

「J」れが勉強する環境なんやうか。」

そのあまりのひどいに4人は絶句していた。

「ヒ、ヒアベズ中に入る。せつと外よりはマシだよ。」

「つまでも突っ立てはまざ」と思ったのか明久が切り出した。

「そ、そだね。外見だけだよね。中は少なくともひやんとしてるよね。」

「そりだよね。ちやんとしてるよね。勉強する所だもんね。」

なのはフロイトが「つづりんと頷く。

「それじゃあ私が先陣きらせてもいいわ。」

そう言いつとはやは教室の戸を開け、

「すこません。ちよつとおくれ「遅いぞウジ虫やる？？？？」  
？。」は？。」

入つて初めてかけられた言葉は凄まじい罵声だった。

「え！？。いや、すまん！。明久だと思つて勘違いして「アキ君  
をウジ虫呼ばわり？」へ？。」

その声にツンツンと立つた短髪の少年で先ほどはやてに罵声を浴びせた少年—坂本雄一はその方に目を向いた。

そこには魔王と悪魔がいた。

「ふーん。はやでちゃんを出でこ頭にいりませんでれいじせアキ君をそんなふうに呼ぶんだ坂本君さ。」

「うれしからうとOCHANASHIする必要があるよね。」

なのはとフエイトはにこりと笑みを浮かべている。田は一切笑つてないが。ちなみにはやては突如の罵声につなだれ、明久がよしよしとなぐさめている。

「ち、ちょっと待ってくれ！」。言い過ぎた。俺が悪かった！。だから？？？？？あ、明久！。助けてくれ！」

2人の尋常ではない殺気にたまらず雄一は明久に助けを求める。

2人とも

明久がはやてをなぐさめながらのはとフニイトに語かける。

「なに?」

2人はいくらか殺氣を収め振り返る。

「アーティスト」

明久の口から突き放す言葉が飛び出した。

「「うん、分かった。」」

「待て明久！。見捨てるな！」

雄一は必死に明久に助けを求めるが、

「「めん雄一。今の2人を止めることは僕にも出来ないよ。」

と明久は言つた。実際自分に向けられてないのに明久は冷や汗が  
ナイアガラと滝のように流れていった。

「じゃあO HANASHIしようか。坂本君。」

なのはがゆづくりと雄一に近づいていくと、

「すいません、ちょっと通してもらえますか？」

背後から声をかけられた。

そこには寝癖付きの髪にヨレヨレのシャツを着たおじさんが立つ  
ていた。

「席についてもらえますか？。HR始めますので。」

「はい分かりました。」

「はい！。（た、助かったー。）」

「「はい。（残念。）」」

「?????はい。」

5人はそれぞれ席に向かう。

「え~、担任の福村慎です、よろしくお願ひします。」

教壇に立つた福村先生は自己紹介をし、黒板に名前を書こうしたがその手を止めた。理由はチヨークがないからである。

「皆さんに卓袱台と座布団は支給されますか?。不備があつたら申し出て下さい。」

「これで不備がないって言う人に会つてみたいよ。」

「いやははは。私も同感。」

明久が呟くと後ろのなのはが同意してきた。

それもそつだらう。机と椅子はなく、あるのは卓袱台と座布団。さらに天井にはクモが巣を作り、畳は痛み、窓ガラスは所々テープが貼られている。

もちろんそれに関する苦情が次々と生徒から寄せられるが先生は我慢してくださいか、自分で何とかしてくださいぐらいしか言わない。

「では自己紹介でも始めましょうか。廊下側の人からお願ひします。」

スクシ。「木下秀吉じゃ。演劇部に所属している。」

その男とは思えない容姿にFクラスの面子は思わず見とれた。

次はその前の少年が立つた。

「青葉空だ。趣味はハンティングゲームと寝。秀吉とは幼なじみだ。その姉貴の木下優子共な。」

「「「異端者には死を!」」」

空の言葉にFクラスの面子の大半がカッターを構えたが、

「言つとくが俺は近くの空手道場で師範のバイトをしている。鳩尾に正拳くらいたかつたら」」。（ゴキシ）

「「「すんませんでした……。」」」

空が言い放ち手の骨を鳴らすと全員謝った。

それを見て空は座つた。

「空、ああ言つふつに言わんでも。危険人物と思われるぞ。」

秀吉が空に話しかけると、

「しかたねえじゃん。ああしねえと俺はカッターダーツのためにされてたんだぞ?。」

空の言葉に秀吉は苦笑した。

「?????????土屋康太。」

次に自己紹介したのは小柄な体の少年—土屋康太だ。彼はムツツリーニーと/orいうあだ名を持っているが本名よりもそっちの方が知名度が高い。

しばらく自己紹介が続き次に立つたのは明久より濃い茶髪の少年。

「藤木コウタだ!。よろしく頼むぜ!。趣味はアニメ鑑賞だ。」

と元気が歩いていくような少年—藤木コウタだ。

そして次に立つたのは、

「アリサ?イリーーチナ?アミヒーラです。ロシアから2年前に  
来ました。よろしくお願ひします。」

淡い色の髪を伸ばした美少女—アリサ?イリーーチナ?アミヒー  
ラだ。

「あつ、ちなみにコウタとは中学の同級生です。」

「おいアリサ!。それ言ひ必要ある??危ね!。」

「ウタが避けた瞬間畳に多くのカッターが突き刺さった。

「ちよつと待てお前らー。マジで当てるつもりだったるー?。」

「ウタが冷や汗をかきながら言ひが、

「 「 「 だまれ！。 異端者！」」

Fクラスの大半の面子は第2射の準備をした。が、

「 みなさん喧嘩は止めてください。 」

福原先生に止められ全員とりあえず引っ込んだ。

そしてまたしばらく自口紹介が続いて、

「 島田美波です。 海外育ちで日本語は会話できますけど読み書きが苦手です。 あ、 でも、 英語も苦手です。 趣味はー 」

ポニー テールで勝ち気な印象を与える少女ー島田美波は一回区切り、

「 吉井明久を殴る事です 。 」

と言つた。

その瞬間なのは、 フェイト、 はやてはきつ、 と美波を睨みつけた。

「 な、 何？。 」

突然の事に美波はうろたえる。

「 別に？？？？？。 」

「 ただ、 最低な趣味だと思つただけ。 」

「その通りや。」

3人はただそれだけ言つと視線を外した。

「3人共どうしたの?。」

状況がよく分かつていな明久が聞く。

「ううん、何でもないよ。」

「大丈夫だから気にしないで。」

「アキ君が気にすることはあらへんよ。」

3人はそれぞれ笑顔で言った。

「????????です。よろしく。」

今度は明久に回つてきた。

「一コホン。えーと吉井明久です。気軽にダーリンと呼んでくださいね」

次の瞬間、

「「「ダアア――リイ――ン――!。」」

野太い男の大合唱。

「?????????失礼、忘れてください。とりあえずよろしく

お願いします。」

明久は吐きそうな顔で座る。

「アキ君？？？？？」

流石のなのはもこれはきつかつたらしく明久に非難の眼差しを向ける。後ろのフェイトとはやてもジト目である。

「「めん。後なのは、次だよ。」

明久は振り返って謝り、なのはを促した。

「うん。」

頷いてなのはは立ち上がった。

「高町なのはです。明久君、フェイトちゃん、はやてちゃんとは幼なじみです。」

「「「吉井を？？？？」」

「ちなみに明久君に危害を加えたらOHANASHIですからね。(一ノ瀬)」

「「「Y、Yes Sir.」」

なのはの目が笑つていない笑顔に全員恐怖を覚えた。

「フェイト？T？ハラオウンです。ちなみに私も明久君になんか

やつたらOHANASHIしますので。特にM?Sさんは田を光らせてくれますので。」

フヒイトはそう言いつとちりひとと美波に視線を向けた。

「八神はやてです。私もなのはぢゃん達を似たよつもんや。あ、でも坂本君にはさつきの件でOHANASHI決定やからな。」

はやはては雄一に田を向ける。

「いや本当にすまん!。頼むからOHANASHIは勘弁してくれ!。この通りだ!。」

雄一が必死に謝つていると、

「あの、遅れて、すいま、せん。」

「「「え?。」」」

全員がその声の方に田を向けるとそこには一人の女子生徒がいた。

## 第2問 OHANASHIと自己紹介（後書き）

これで主要キャラはほとんど出ました、ゴッドイーターにはもう数人キャラがいますがそれは後ほど。感想待ってます。次こそは設定です。では！。

## 設定!。（前書き）

やつと「」を投稿できました。とつあえず「」の設定を崩せなこよひで行きたいです。

では！。

5 / 30 フェイ特の点数変えました。よく考えたら化け物すぎました。

設定!。

「ゴッヂーダイターサイド

青葉 空くあおば そらゝ

身長 172cm

外見 フェイスエディッターで髪は肩まで届く長さ。色は黒だが所々に銀髪が混じっている。

趣味 昼寝 ゲーム（特にハンティングタイプ）

成績 生物以外180～220程。生物410～420

木下姉弟とは幼なじみの少年。性格は幾らかマイペースな所があるが基本面倒見がいい。ボケは基本せず、ツッコミをしていく。勉強は真面目に取り組むが眠気には絶対勝てず眠いと思った直後には落ちている。だが歩いている時はさすがに寝ない。Fクラスに入った理由は寝落ち。

酒に極端に弱く、ほんのちょっとでも飲んだらまるで別人のようになる凶暴化し暴れる。

1年前から両親が仕事で海外に行つてゐるため1人暮らし。家事は普通にこなせ、料理は人並み以上にうまい。

空手を4歳からやつており、今では自分が学んでた道場で師範をする程の腕前。

秀吉は空を親友として兄貴分として頼りにしている。優子は彼と何かと張り合うが好意を寄せている。

### 召喚獣

F制式上衣と下衣。色はコバルト。

新型神機 銃身 ヤタガラス真 刀身竜殺し 炎獄 装甲 剛炎  
タワー真

腕輪 ブラッヂドレイジ 螺旋を描く紫の炎を放つ。一撃で50点消費する。また、消費する点数を増やすことで威力と範囲を上げる。100点 Lv1。200点 Lv2。400点 Lv3。Lv3の時は範囲はBクラスの教室半分。威力は教師の召喚獣を一撃で消せる。

### 藤木コウタ

家族は両親と妹。ただし父親は単身赴任で家にいない。

アリサとは中学校3年の時同じクラスだった。

成績 全科目50～80点。

召喚獣 アリーキャットに旧型神機。銃身 モウスイブロウ

腕輪 拡散型ミサイル。4発のミサイルを放つ。一回で70点消費。空と同じように消費点数を増やすことで、ミサイルの数を増やす。Lv1消費点数140点。6発。Lv2消費点数230点。

8発。 Lv3 消費点数320点。 10発。

アリサ？イリーニチナ？アミエーラ

中学3年の時にコウタの中学校に転校してきた。両親は健在だが、今は仕事でロシアに帰っている。

Fクラスに入った理由は風邪で試験を休んだため。

成績 世界史と古典以外220～240。世界史400点代。古  
典30点代

召喚獣 ミュータイニアに新型神機。銃身 レイジングロア。刀  
身 アヴェンジャー。装甲ブリムストーン

腕輪 ホーミングレイ。敵を追尾する5本のレーザーを放つ。1  
発60点。消費点数を増やすことで本数と威力を増す。Lv1。消  
費点数150点。本数9本。Lv2。消費点数240点。本数12  
本。Lv3。消費点数310点。本数15本。

リリカル側

高町なのは

明久とは赤ちゃんの頃からの付き合い。3人の中で一番付き合い  
が長い。今ではいざといふ時に田で意志を通じあえる。

幼稚園の頃から明久の事が好きで家族のみなさんも明久だつたら  
と言つている。

Fクラスに入った理由は明久と同じクラスになりたいがために白紙にしたから。

成績 数学以外110～130点。数学200～240点。

召喚獣 バリアジャケットにレイジングハート

腕輪 砲撃。消費点数300点。極太の砲撃を放ち斜線上をなぎ払う。つまりスタートライドブレイカー。

フェイト?T?ハラオウン

小学校の頃に明久とのはの学校に転校してきて、なのはと知り合いそこから明久とも仲良くなつた。

なのは同様明久に好意を寄せている。

Fクラスに入った理由は試験を風邪で休んだため。

成績 世界史以外200点代。世界史500点代。

召喚獣 バルディッシュにバリアジャケット。

腕輪 ザンバーフォーム。バルディッシュを大剣に切り替える。消費点数60点。一度切り替えるとそのままの状態になる。

八神はやて

フェイトの後に明久達の小学校に転校してきた。

明久とは親友のような関係で実はとりたてて特別な好意は持っていない。

恋はどうぢらかといつと応援するほう。今はなのはとフェイトの恋を応援している。

Fクラスに入った理由は明久と一緒にの方が楽しくなりそつだからと白紙で出したため。

成績 全科目130～140

召喚獣 シュベルトクロイツにバリアジャケット。

腕輪 砲撃。消費点数300点。なのはの砲撃に似た一撃を放つ。ただしこちらは範囲は広いが威力が低め。

バカテス側

明久は原作よりちょっと頭が良くなり、召喚獣が原作8、9巻になつてます。

明久の強さが上がつてます。恐らく雄一とタイマンはれるかもしれません。（理由、なのはの家の道場に通つてたからです。ちなみにには達も明久にくつついてやつてたため結構強いです。）

明久は姫路にとりたてて恋心は抱いていません。友達として見ています。

優子の性格が丸くなっています。

## 設定!。（後書き）

こんな感じで行きます。ちなみに他のみなさんは原作沿いの性格ですが展開で変わっていくかもしません。ちなみに重苦しいタイプの設定は全部取っ払ってます。ではまた次回!。

### 第3問 戦争の正義論（論議文）

本当に革新ですいません。

仕事が忙しくありません。

でまあいいやー

### 第3問 戦争の引き金

教室のドアから現れた女子生徒を見てクラス内がにわかに騒がしくなる。それもそつだらう。彼女は本来このクラスにはいるはずがない生徒だ。しかしその中で明久、なのは、フェイト、はやはては冷静だった。彼女がここに居る理由を知っているからだ。

「ちよづじよかったです。自己紹介をしているといひなので姫路さんもお願ひします。」

「は、はい！あの、姫路瑞希と言います。よろしくお願ひします？？？」

福原先生に促され小柄な身体と背中に届くまでの柔らかそうな髪を持つた少女ー姫路瑞希は自己紹介をした。

「はいっ！質問です！」

すると一人の男子生徒が手を挙げた。

「なんでここにいるんですか？」

聞き方によつては失礼な質問だが、彼女の場合仕方ないのかもしれない。

元々瑞希の学力は学年でも常に上位にあるほど高い。

そんな彼女が学年最下位のFクラスに来たのだから誰もが疑問に思うだらう。

「そ、その????????振り分け試験の時に高熱を出してしまいました?????????」

この学園の試験は途中退席した場合再試験もなしに〇点扱いになつてしまひ。

するとセレカシコでなにやら言い訳の声が上がり始めた。

「そういうえば俺も熱が出たせいでFクラスに。」

「ああ、化学だろ?あれはむずかしかったな。」

「俺は弟が事故に遭つたと聞いて実力出し切れなくて。」

「黙れ一人っ子。」

「前の晩彼女が寝かしてくれなくて。」

「」「異端者には死を……。」「」

「すんまつせん!嘘つきました!」

これは想像以上にバカばかりのクラスである。

「で、では一年間よろしくお願ひします!」

そう言つと瑞樹は明久と雄二付近の空いてる席に着いた。

「さ、緊張しました~」

そう言つて瑞希が卓袱台に突つ伏すと、

「瑞希ちゃん、久しぶりだね。」

「瑞希も同じクラスなんだね。」

「いやー奇遇やね。」

なのは達が声をかける。どうやら瑞樹がここに来た理由は知らない事にするらしい。

「え！？ なのはちゃんにはやめてちゃんと、フエイトちゃんまで…？ ビツヒヒヒニ！？」

驚きを隠さず瑞希が聞くと、

「私は試験を風邪で休んじゃってね。」

「私は…………ちょっとね。」

「私も…………ちょっとな。」

3人はそれぞれの反応で返す。

「あのさ姫」「姫路」・・・

話が一区切りついたところで明久が声をかけたが雄一がかぶせる  
よつこ声をかける。

「は、はい。何ですか？えーと……」

「坂本だ。坂本雄一。よろしく頼む。」

「あ、姫路です。よろしくお願ひします。」

深々と頭を下げ、挨拶も丁寧なあたり育ちが良さそうである。

「ヒロで瑞希ちゃん。体調の方は大丈夫なの？」

「あ、それは僕も気になる。」

なのはが声をかけると明久もかけた。

振り分け試験の時明久は瑞希の隣の席に座つており、倒れた時は保健室まで付き添つてあげていた。

「よ、吉井君！？」

明久を見て瑞樹は驚いたよつて声を上げる。

「姫路。明久がブサイクですまん。」

「そ、そんな！目もパッチリしてるし顔のラインも綺麗だし、全然ブサイクなんかじゃないですよ！」

「せやな。少なくとも女の子を出会いがしらにウジムシ呼ばわりするだれかさんよりかはイケてるなあ。」

はやてが雄一を見ながら囁く。耳元でさりげない深いキズを負つ

たらしい。

「うぐつ・・・・ま、まあ確かに見てくれは悪くないな。そういう  
えば俺の知り合いにも明久に興味を持つてる奴がいたな。」

「え、それって誰「それって誰ですか！？」

明久を遮つて瑞希がすごい勢いで聞いてくる。

「確か久保——」

「久保？」

「利光だったかなあ。」

久保利光（性別　オス）

「おい明久。声を殺してさめざめと泣くな。」

「もう僕お嬢に行けない。」

その明久をお返しといつよつにはやでがよしよしと慰める。

「安心してアキ君。いざとなつたら私が貰つたげるから。」

「「「はやて（ちゃん）！？」」

はやての発言には、フェイト、瑞希は仰天した。

「冗談やて3人共。私にとつてアキ君は親友やてことは分かつて

るやね。」

はやてはからからと笑つた。

「はいはい。そこの人達静かにしてくださいね。」

福原先生が教卓を叩いて注意をする。

「あ、すいませ・・・」

バキッ（教卓が砕ける音）

バラバラバラ（破片が崩れる音）

教卓がゴミ屑になつた。

「え～替えを用意してきます。少し待つてください。」

そう言つと福原先生は教室から出て行つた。

それを見た明久は何か考え込むと、

「・・・・雄一、ちよつといい？」

「ん?なんだ?」

暇になつたからか欠伸をしている雄一に明久が声をかける。

「」(じや話しにくいから、廊下で。)

「別に構わんが。」

2人は立ち上がって廊下に出る。それを空はちらりと見ると、自らも立ち上がった。

「んで話つて？」

廊下に出た所で雄一が切り出した。

「この教室のことなんだけど、何だ? 何の話すんだ?」 って空君  
「! ?」

明久が話そうとした所で空が割り込んできた。

「空でいいよ。さあ、続けて。」

「う、うん。で雄一この教室の設備なんだけど。」

「ああ、想像以上に酷いもんだな。」

「空もやう思ひでしょ?」

「そうだな。こいつはあまりにもな・・・・・

「で△クラスの設備は見た?」

「ああ、凄かつたな。あんな教室は見たことがない。」

「それ以前にあれは教室の括りに入るのか？」  
「もさうだけども。

「

空がどこか呆れたように言つた。

「そこで僕からの提案。Aクラス相手に試合戦争をやつてみない？」

「いきなりAクラス相手にか！？」

空が驚いたように声を上げる。

「…………何が目的だ。」

雄一が警戒するように田代を細め明久を見る。

「2人の前じゃ誤魔化しても意味ないと思つから素直に言つたが、理由は姫路さんとはやての為だよ。」

その言葉に空はん？と首を傾げた。

「なあ、明久。姫路は体が弱いからと分かるがハ神は？」

「ああ、はやても子供のころ体が弱かつたんだ。」

「本当か？」

「うん。今はもう大丈夫だけどこの環境だとまた具合悪くしちゃ

「いそつなんだよね。」

なるほどと2人は頷いた。

「雄一いいんじゃねか？なかなかおもしろそうだしよ。」

空が口元に笑みを浮かべながら言つ。

「お前は戦闘狂かよ。まあいい明久に言われるまでもなく俺自身Aクラス相手に試合戦争をやるつと思つてた所だ。」

「え、どうして？」

「世の中学力が全てじゃないって証明したくてな。」

「？？？」

「まあいいだろ。先生も戻ってきたし教室に入るぞ。」

そう言つと雄一は教室に入つていぐ。

「ねえ空。どういう意味？」

「ああ？俺にも分からん。」

空は肩をすくめ、2人は教室に入つていった。

そしてそのまま自己紹介は特に問題なく進んで行き、

「坂本君。キミが自己紹介の最後ですよ。」

「了解。」

雄一の番になり、雄一は教卓に上がった。

「Fクラス代表の坂本雄一だ。俺のことは代表でも坂本でも好きに呼んでくれ。所で皆に一つ聞きたい。」

そう言ひと雄一は視線を巡らせた。

かび臭い教室

古く汚れた座布団

薄汚れた卓袱台

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが・・・・不満はないか？」

「『大ありじやあつ！』」「『』」「『』」

Fクラス魂の叫びである。

「だろう？俺だってこの現状に大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている。そこでこれは代表としての提案だが・・・FクラスはAクラスに試験召喚戦争を仕掛けようと思う。」

こうして戦争の引き金は引かれた。

**第3問 戦争の弓削金（後書き）**

意見感想お待ちしております。

#### 第4問 勝てる要素（前書き）

やつといじや書きあがつました。本当に時間がかかる。仕事が忙しう  
あります。

では駄文ですがじつがー。

#### 第4問 勝てる要素

「勝てるわけがない。」

「Jre以上設備を落とされるなんて嫌だ。」

「姫路さんがいれば何もいらない。」

「なのはせんと付かねーみたい。」

「フロイトせんとイチャつきたい。」

「はやじさんとH口談義したい。」

「アリサさんに蔑まれたい。」

「おい！最後の方全く関係ない」とぱつかじやねえか！個人願望  
だし！」

「アタシそんな趣味持つてませんよー？」

クラスのところじろりから悲鳴が上がる。その中に紛れ込んでいたおかしいものには姫とアリサがソシ合ひでいた。

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる。」

「何をバカな事を。」

「できるわけないだろ。」

「何を根拠にそんな事を。」

雄二の宣言に全員がそんな声をあげる。そんな声があがるもの無理はないだろう。実際AクラスとFクラスの戦力の差は歴然だ。

「根拠ならあるぞ。」このクラスには試験召喚戦争に勝つことのできる要素が揃っている。今からそれを証明してやる。」

そんな雄二の言葉を聞きクラスの中がざわめく。

「おい康太。畠に顔をつけて姫路と高町とハラオウンとハ神のスカートを覗いてないで前に来い。」

「……………！」（ブンブン）

「は、はわ。（にゃー！）つに間にー？）（わわわわ。）（ふつ、甘いで土屋君）」

康太は顔に畠の跡を手で隠しながら壇上に立つた。

「土屋康太。こいつがあの有名な寡黙なる性識者だ。<sup>ムツツリー</sup>」

「……………！」（ブンブン）

ムツツリー。それは男子生徒には恐怖と畏敬を、女子生徒には軽蔑を持って呼ばれている。

「ムツツリーだと…………？」

「馬鹿なヤツがそつだところのか？」

「だが見ろあそこまで明らかに覗きの証拠を未だに隠そいつとしている・・・・・」

「ああ。ムツツリの名に恥じない姿だ。・・・・・」

ちなみにムツツリとはムツツリスケベって意味なのだが瑞希は分からぬのか頭に？？？を浮かべていた。

「姫路の事は説明することもないだろう。既だつてその力はよく知つているはずだ。」

「えつ？わ、私ですか？？」

「ああ、ウチの主戦力だ。期待している。」

確かにそうである。彼女は学年2位の実力だ。戦争でこれほど頼りになる戦力はないだろう。

「そうだ。俺たちには姫路さんがいるんだった。」

「彼女なら△クラスに引けをとらない。」

「彼女さえいれば何もいらない。」

「おい！最後のヤツまつたつく関係ねえだろ！いいかげんにしろ！」

瑞樹へのラブホールに空がツツ「む。

「木下秀吉だっている。」

「うんむ？ わしかの？ わしよりも空の方が頼りになるぞ。何と言つてもAクラスに入れる実力じゃからな。」

「何だつて？」

「本当なのか？ 青葉。」

「おひ」

周囲の質問に空は特に謙遜も何もせずに言い放つた。

「それにハラオウンもいる。」いつもAクラス入りの実力だからな。

「そうだ。フェイトさんもいた。」

「フェイトさんと付き合いたい。」

「ちよつと待つてください。また関係無いの混ざりましたよ。」

「んじはアリサがツツ「む。どうやらこの2人はボケにどうしても反応してしまひしき。」

「お～～アリサもAクラス並みの実力だぜ～～」

「ちよつと歌ウタ！」

「本當かー?」

「当然俺も全力を尽くす。」

「坂本って小学生の頃は神童とか呼ばれていなかつたか?」

「それじゃあ振り分け試験の時は姫路さんと同じく体調不良だつたのか。」

「実力はAクラスレベルが5人もいるつてことだよな!」

教室内の士気は確実に上がつていつたが、

「それに吉井明久だつている。」

その一声でクラス内の士は一気に下がつた。

「ちよつと雄一ーじつしてそこで僕の名前を呼ぶのも...全くそんな必要はないよね!」

「誰だ吉井明久つて。」

「聞いたことないぞ。」

「ホラ!折角上がりかけていた士氣に陰りが見えてるしーーつて、なんでみんな僕を睨むの?士氣が下がつたのは僕のせいじゃないよね!?」

「知らないようなら教えてやる。ここつの肩書きはく観察処分者へだ。」

「…………それってバカの代名詞じゃなかつたか？」

クラスの誰かが致命的な台詞を言つた。

「ちう、違うよーちょっとお茶田なー6歳につけられる愛称で。」

「そうだバカの代名詞…………ちょっと今まで高町にハラオウンに八神。そんな目で俺を睨むな。話はまだ終わつてないから。」

雄一がバカの代名詞と言つた瞬間3人は殺氣を込めて睨みつけていた。

「さて続きはと言つのは明久は実質的にFクラスの2番目の戦力だということだ。」

「何ー?」

「それはどーことだー?」

クラスの中からそんな驚きの声があがる。

「説明するどだな、観察処分者の召喚獣は物理干渉が出来る。そのかわりにフィードバックで召喚獣が受けたダメージや疲れが本人にもいくらか反映される。」

「おいおい。それっておいそれと召喚できないんじやないか?」

「そうかもしれん。だが利点もある。明久はたびたび教師の雑用に駆り出されて召喚獣を使っている。おかげで扱いに慣れているんだ。だから俺たちは大雑把な攻撃や回避しかできないが明久は体をずらしての回避や相手の攻撃に合わせてのカウンターとかができるんだ。」

「おお……」

「それはかなり有利になるんじゃないかな？」

「そういうことだ。とにかく、俺たちの力の証明として、まずはDクラスを征服してみよつと思つ。皆この境遇は大いに不満だろ？」

「当然だ！」

「ならば全員筆を執れ！出陣の準備だ！」

「おお――――――――――」

「俺たちに必要なのは卓袱台ではない！システムディスクだ！」

「うおお――――――――――」

「お、おー・・・・・・・・」

「へへ、どうなるのかな。」

クラスメイトの勢いに瑞希は完全に呑まれ、コウタは楽しそうな顔をしてくる。

何はともあれ彼らの戦いは始まった。

#### 第4問 勝てる要素（後書き）

説明が難しそぎます。文才が欲しいです。ではまた次回！

## 第5回 露強のクラス（繪書セ）

結構早めに投稿でもおもった。

そして今までで一番長いです。

ではどうぞー

## 第5問 最強のクラス

「明久。Dクラスの宣戦布告の使者になつてこい。無事大役をはたせ。」

「…………下位クラスの使者は大抵ひどい目にあうはずだよね。

「いやお前の場合それはない。むしろクラスの連中がひどい筋の氣しかしない。」

「う～～ん、まあいつか。分かつたよ。それじゃあ行つてくる。

そう言つと明久は教室を出て行つた。

「なあなあ坂本。吉井つて強いのか？」

いまのやりとりを聞いたコウタが聞くと、

「ああ、そうだ。前に一度本気で喧嘩した事があつたんだが俺と互角にやりあつたからなあ。」

雄一は遠い目をしながら言った。

「当然だよ。アキ君は私の家の道場に通つてんだから強いに決まつてんじゃん。」

なのはが自分の事のように胸を張る。

「ちなみに私たちもアキ君の付き添いで顔を出している内に少しやつててね、アキ君程じゃないにしろ強いよ。」

「そのとおりや…………所で坂本君はまたアキ君を……。

・

「いやまで！確かに俺は明久を指名したが最終的にあいつ本人が行つたぞ！」

「関係あらへん。さつきの件も含めてO'HANASIを「ただいま～」あ、おかえりや、アキ君。」

雄一にはやでがO'HANASIしようとした所で明久が帰つて来てはやてはそつちに気がそれた。

（助かつた―――しかしこのままではちょっとした拍子にO'HANASIされちまう。なんとかしないと。）

雄一がそんなことを考えている中なのは達は明久のほうに駆け寄つた。

「大丈夫アキ君？どこかけがとしてない？」

「ああ、うん。大丈夫だよ。」

「にしても早かったね。攻撃されなかつたの？」

フェイトが聞くと明久は「くらかバツが悪そつに鼻を掻いた。

「いやそれが、宣戦布告と同時に一人攻撃してきたんだけどその人に思いつきり回し蹴りぶち込んでしゃって。それでその人が机をまきこみながら吹っ飛んで行つたの見て他の人達はあつさり受けてくれたんだ。あの人には悪いことしちゃつたなあ・・・・・」

その言葉に教室の中全員（なのは、フェイト、はやて、空をのぞく）が戦慄を覚えた。

「さて、それじゃあ今からミーティングを行つぞ。」

そう言つと雄一は教室の外に出て行つた。どうやら別の場所で行ひらじい。

その後を空とヒウタと秀吉とアリサ瑞希となのはとフェイトと美波と続く。

「・・・・・・・・（サスサス）」

さらに頬の辺りをさすりながら康太が続く。

「ムツツリーー。覗いていた時の畠の後なら消えてるよ?」

「・・・・・・（ブンブン）」

明久の指摘に康太は勢いよく首を振つた。

「いや、今否定されても、ムツツリーーがHなのは知つてるから。」

「

「・・・・・・（ブンブン）」

「ここまでバレてゐるのに否定し続けるなんて、ある意味凄いと思つ。」

「…………（ブンブン）」

「ちなみに何色だつた？」

「みずこりに白に黒…………そしてスペツツだつた。」

最後の方はくやしそうに康太は言つた。

「スペツツははやでだね。まあ、彼女もムツツリー一並にエロだから考へが読まれてたんだね。それじゃあ行こうか。」

そう言つと明久は教室を出てそれに康太も続いた。

メンバーは屋上に集合していた。

雲一つない空から眩しい光が差し込む。春風で瑞希のスカートがはためきそれを康太は注視している。それを見たアリサは小声で「ドン引きです。」と呟いた。

「明久。宣戦布告はしてきたな。」

「一応今日の午後に開戦予定と告げてきたけど。」

雄一がフロンスの前の段差に腰を下ろし明久達はおののお腰を下ろした。

「それじゃあその前にお皿ですね。」

「そうだね。アキ君、お弁当作つて来てくれた?」

「もちろんだよなのは。そういうわけぢゃないか?」

「忘れてなつて。大丈夫。」

明久となのはがそんなやりとりをしていると、

「なのはーーいつの間にお弁当交換の約束してたのーー?」

「ずるいわ!私もアキ君のお弁当食べたかったのに始業式やから次の日の楽しみに我慢したのにーー!」

フロイトとはやでがそれぞれ大声を上げた。

「ちよつと吉井ーーどう・・・・まつてなのはさん。頸動脈から手を放して。」

「その前にアキ君に襲いかかろうとしないでね。」

明久に襲いかかろうとした美波は即座になのはによつて頸動脈を掌握されていた。その後引き下がつたのでなのはも手を放す。

「?..どこ?..」などだ?」

お弁当の件を不思議に思ったのか口ウタが聞いてきた。

「ああ、僕らは普段は自分で自分のお弁当作ってるんだけどさ  
どき約束した人2人が互いの分のお弁当を作ってくれるんだよ。」

「ほう、それはおもしろいじゃな。空、わしらもやってみんか  
？」

「ん？ん~~~~~、まあそつだな。お前らの料理の腕前の確認  
もかねてやるか。」

空の言葉に秀吉はお手柔らかに、と苦笑していた。

「本当か明久？お前一時塩と水と砂糖で生活しなかつたか？」

「本当ですか？よく生きて来れましたね。」

その事実にアリサがあきれたような声を出す。

「あ~~~~まあ、そつなんだけど・・・・・・・3人にOHAN  
ASIされちゃったからね。」

明久が遠い田で空を見上げると全員が心から同情した。幼馴染3  
人はその時の事を思い出しやりすぎたかなあと思つた。

「あ、あの、良かつたら私もお弁当作つてしましようか？」

「」「え？」「」

ここまで黙っていた瑞希が突然そんなことを言つてきた。

「え？ 本当姫路さん。」

「はー。」迷惑でなければ。

「やつたーお皿のメーラーが増えたー。」

明久はガツツポーズを小さくガツツポーズしている。それをなのはとフエイトは複雑そうな顔で見ている。

「・・・・・ふーん。瑞希って随分優しいのね。吉井にだけ作つてくんなんて。」

「あ、いえ嘘をこなすも・・・・・」

美波がおもそろくなさりつゝと瑞樹はそんなことを言った。

「俺たちもいーのか？」

「はい。嫌じゃなかつたり。」

「そんじやあお葉に甘えるか。」

「もうですね。断るのも悪いですし。」

アリサの言葉に全員が頷いた。

「分かりました。それじゃあみんなを作つてきますね。」

こうしてその場にいた全員に死亡フラグが立つたがそれはまた別の話。

「なあなあ話が結構それでるような気がしてんだけどさあ。俺たちもともと試合戦争の話するためにきたんだろう。」

「ウタが頭の後ろで腕を組みながら言いつと全員が話を思い出した。

「雄二。一つ気になっていたんじゃがどうしてDクラスなんじゃ？段階を踏んでいくならEクラスじゃろうし勝負に出るならAクラスじやろう。」

「そういえばそうだね。」

「まあな。当然考えがあつてのことだ。色々と理由はあるんだがとりあえずEクラスを攻めない理由は簡単だ。戦うまでもない相手だからだ。」

「え？でも、僕らよりはクラスが上だよ？」

明久が訳が分からぬといつよう聞く。

「明久。自分の周りの面子をよく見てみる。」

「えへへと・・・・・」

明久はグルリと自分の周りの顔を見て、

「うん。幼なじみが3人に美少女が3人にバカが3人にムツツリが1人にツツコミが1人いるね。」

と結論づけた。

「誰が美少女だと…？」

「いやまで！雄一が美少女に反応しておかしいだろー！？」

「…………（ぱつ）」

「おー————土屋まで反応しやがったーっていつかシシ」「いつて俺か！？俺の事なのか！？」

「これだけの量のボケを一人でズバズバとわざと空はシッコリの名に恥じないであろう。」

「気を取り直して。まあ、要するにだ。姫路に空にハラオウンにアミエーラに問題がない以上まともにやりあつてもEクラスには勝てる。」

「なるほどね。少しでも手強ی相手と戦つて勝つて士氣を上げようつてわけだね。」

「そういうことだ高町。話が早くて助かる。それに打倒Aクラスに必要なプロセスだ。」

雄一が腕を組んで説明した。

「でもそれってDクラスに勝てないと話にすらなりませんよね。」

「そんなことはなーさ。」

アリサの心配を雄一は笑い飛ばした。

「お前たちが協力してくれるなら勝てる。ウチのクラスは——  
——最強だ。」

その言葉に全員が笑みを浮かべた。

「いいわね。おもしろいやつじゃないー。」

「そりゃな。Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの！」

「…………（グッ）」

「が、頑張ります。」

「よししゃ——んじやあやるかあー。」

「全力全開で行くよ。」

「私も思いつきつけるからね。」

「暴れるでえ——。」

「よし。それじゃあ作戦を説明する。」

そう言つて雄一は勝利のための作戦を説明し始めた。その中で明久は、

「それにしてもまさかこんなに早く勝負できるかもしれないなん

てね。・・・・・絶対Aクラス戦まで負ける事はできない。」

と小さく呟いていた。

## 第5問 最強のクラス（後書き）

明日からはゴッドイーターの方に集中しようつと頑張つのでまた更新は遅れます。

ああ～～明日から夜勤ですよ。昼夜逆転ですよ。シラリーですよ～～。

でも頑張りたいと思つます。では一。

## 第6問 Dクラス戦パート1（前書き）

はい、今日はDクラス戦第一回目です。

今日は「ウタが頑張ります。

ではどうぞ！

## 第6問 Dクラス戦パート1

「藤木！木下達が渡り廊下でDクラスの連中と交戦状態に入ったわよ！」

「こちらに走つてくる美波を見てなんか女らしさがたりないよなあ」とコウタは思った。彼から見ても美波はかわいい方だと思うし足も長くスタイルがいい。

なんだろうと考え、

「あ、そうか。胸が無いんだ。」

「アンタの指を折るわ。小指から順番に全部きれいに。」

「うわー。」めん。「やすいませんでした！」

「ウタはまるで土下座をするかのような勢いで謝る。

今戦闘を行つてているのは秀吉が率いている先攻部隊だ。コウタと美波は中堅部隊にいる。

どういう状況か確認しようとコウタが耳を澄ますと、

「まあ来いー。この負け犬が！」

「て、鉄人！？嫌だ！補修室だけは嫌だ！」

「黙れ！捕虜はこの戦闘が終わるまで補修室で特別講義だ！終戦

まで何時間かかるか分からんがたつぶり指導してやるからな。」

「た、頼む！見逃してくれ！あんな拷問耐え切れる気がしない！」

「拷問？そんなことはしない。これは立派な教育だ。補修が終わる頃には趣味が勉強。尊敬するのは『富金次郎』、といった理想的な生徒に仕立てあげてやるつ。」

「イヤだ！イヤだ！いや――（バタン、ガチャ）」

そんな声が聞こえてきた。どう考へても悪質な洗脳だらうと口々夕は思った。

「島田、中堅部隊全員に連絡。」

「なに？何を云えればいいの？」

「全員絶対死ぬな。死にそうになつたら全力で逃げていいかつて。」

「ええ、わかつたわ。」

やう言つと美波は云しに行つた。

「カタとして今はすぐでも逃げ出したいのだが、彼にも男のプライドがある。庄されたからにはやり遂げる自分を鼓舞する。

「よつじゅあーみんな行くぞー」

「おおお――――――――」

「コウタの激励と共に中堅部隊の全員が突撃した。

すると前から誰かがこちらに走って来る。

先攻部隊を率いていた秀吉だ。

「おう秀吉。大丈夫か？」

「うむ。戦戦死は免れてはあるが点数はかなり厳しいところまで削られていしまった。召喚獣ももうヘロヘロじや。」

「おっしゃ。ここは俺たちに任せてテスト受けなおして来いよ。」

「そうじやな。全教科受けてる時間はなさそうじやが、一一教科でも受けてくれるといつ。」

そう言つと秀吉は教室に向かつて走り出した。その後を先攻部隊の生き残りが続いていく。

そして入れ替わりにコウタたちが前に出る。

「げ、あいつら五十嵐先生に布施先生連れてやがる。科学で一気にけりつける気かよ。」

コウタは思わず顔をしかめる。

今回は学年主任を立ち合いで総合科目で勝負してたのだがこれでは時間がかかる。Dクラスは短期勝負に移行したようだ。

「なあ、島田。お前化学は？」

「全くダメ。60点台常連よ。」

「俺は今回50点台だ。いつなつたら五十嵐先生と布施先生を避けて学年主任の所に行くな。」

「了解！」

行動しようとした瞬間。

「あ、そこにいるのはもしや美波お姉さまー五十嵐先生、こっちに来てくださいー！」

「くつー！ぬかつたわ！」

螺旋状のツインテールの女子生徒がこっちに走ってきた。しかも相手はすでに召喚獣を呼び出している。

「ちよ、藤木助けて！」

「ああ、もうじょうがねえなあー試獣召喚つ（サモン）ー！」

美波の前にコウタが躍り出るとそのまま召喚する。

幾何学的な魔法陣から出てきたのは露出の多い服に短パン、そして巨大な重火器を持ったコウタをデフォルメしたような姿の召喚獣だ。

Fクラス 藤木コウタ VS Dクラス清水美春

「おっしゃあ！初陣だ！」「ちよ派手」「…………」

「コウタが奮起しいぞ戦おうとする」と、

「殺します……美春とお姉さまの邪魔する人は全員殺します。  
…………」

美春の凄まじい殺気に青ざめると美波を振り返り、

「交代しない？」

と提案した。

「いやー絶対いやー！」

ものの見事に拒否られてしまった。

「うくしょーーやつてやるー死にもの狂いじゃコウター！」

そういうとコウタの召喚獣は重火器一神機を乱射した。

「くつー近づけな…………やあー？」

乱射した弾は美春の召喚獣をつまいで足止めし、そして弾が足に当たり体制が崩れた。

「ナイスよ藤木！試験召喚（サモン）ー。」

そこに美波が召喚獣を召喚する。

青い軍服にサーべルの美波の召喚獣はそのまま美春の召喚獣を切り倒した。

「おいなんだよ！いいとこ取りじやねえかーふざけんなよ！」

「うつさいわね！細かいこと気にしないでよ！」

などと2人がぎゃーぎゃー口論していると、

「殺します……」豚野郎は殺します殺します 口 口 口 口 口 口  
口 ……」

美春が精神崩壊を起こした。

「ちよつー美春ー？」

「怖えええええー！鉄人！補修室ーーー！」

「ウタが悲鳴じみた声で叫ぶと、

「西村先生と呼ぶんかバカ者ー！おお、清水か。勉強漬けにしてやるからこっちに来い。」

そう言つと西村先生は美春を軽々と抱き上げた。

「お、お姉さまー！美春は諦めませんからねーーー」のまま無事に卒業できるなんて思わないでくださいねーーー！」

かなり危険なセリフを残しながら美春は補修室に連行された。

「島田…………お前厄介なヤツに田付けられてるな。」

「まあね…………」

「ウタの隣で美波ははあ、と深いため息を吐いた。

## 第6問 Dクラス戦パート1（後書き）

最近気づいたのですが・・・・・・俺意外と書くスピードが早い。

動画見るの少なくすれば1週間無理でも2週間に1回はいけるかもしがません。

ではまた！

## 第7問 Dクラス戦パート2（前書き）

今回は明久が活躍します。他のみんなは・・・・次で活躍させます。

ではどうぞ！

## 第7問 Dクラス戦パート2

渡り廊下でコウタ達Fクラスの面子はびりかにうにか戦っていた。

といつのも、

「うわ、あぶね！ おい藤木！ ちゃんと狙え！」

「しかたねえだろ！ まだ召喚獣の扱いに馴れてねえんだよー。」

後方から援護をしているコウタは正確な狙いをつけて撃つということがまだうまく出来ない。だから何度も誤射をしそうになってしまる。そのせいでもうまく戦えていないのだ。

まあ、その乱射されている弾のおかげでDクラスの連中もつまんに戦えないのだが。

「藤木！ 助けてくれ！」

「コウタが目を向けると、一人の生徒がやられかけている。

「ちつー！ 誤射しても怒るなよー！」

「コウタはできるかぎり早く狙いを定めると、引き金を引いた。

弾は相手の召喚獣の頭部をつまく撃ち抜き、戦死にした。

「助かつたぜー！ 藤木。」

「気をつけろよ。」などわよ。」

「ああ……藤木！後ろー。」

その声に「ウタが後ろを向くと、一人が切りかかってきている。

「くそー。」

「ウタは撃ち抜こうと引き金を引くが、

「弾切れ！？」

銃口からは弾はず、カチカチとむなしい音が響くだけだった。

「もうつたぜ、藤木ウタ！」

相手の刃はまづ田の前まで来ていた。

「くそー！」までかよー。」

「ウタが目を閉じた瞬間、

「試験召喚！」  
サモン

その声と共に一体の召喚獣が相手の召喚獣を吹き飛ばした。

「ウタが目を開くと、

「もつとしつかりしてよ、隊長さん。」

苦笑している明久がいた。

「明久！もう補充試験終わったのか？」

「いや、全部は終わってないよ。僕だけ早めに切り上げて援軍に来たんだ。なのは達は後から来るよ。それよりも早くリロードを。」

「おう。すまねえな。」

そう言つと「ウタの召喚獣はリロードを始めた。

「ちつ、させるな！藤木の護衛は一人だけだ！一人まとめてやつちまえ！」

その声と共にDクラスの二人が明久達に向かって突っ込み、最初の一人が剣を振り下ろしてきたが、

「そんな単調なの当たんないよ。」

明久の召喚獣は懐に飛び込むと同時に木刀を突出し、相手の首に叩きつけ、吹き飛ばす。

更にもう一人の顎を素早く木刀でかち上げるとがら空きの胴を思いつきり薙ぎ払い、吹っ飛ばす。

「な、何でだ！？何でこっちが一方的にやられてんだ！？」

「マグレだ！点数じゃこっちが勝つてんだ。一気にやつちまえー。」

そして更にロクラスの生徒が突っ込んできたが、

「やせるかよー。」

リロードを終えた「ウタの召喚獣が神機を乱射。弾幕で相手を足止めする。

明久はとつさに召喚獣をかがませて何とか回避する。

「ちょっと」「ウター撃つならもつと早く言つてよー危なかつたらねー！」

「わりい、わりい。でも避けれんじやん。だったら良いじやん。」

「ウタはからからと笑いながら手を動かす。

「たくつ・・・・・よし！行くよー。」

「おうー。」

明久が突撃しようとした瞬間、

ピンポンパンポーン 連絡いたします

校内放送が突然流れてきた。

「こ」の声つて・・・・・横溝君？」

「そう言えばあいつちょっと前に教室に戻つてたなあ。」

二人が首をひねつてゐると、

船越先生、船越先生。須川君が体育館裏で待つてあります。

「……………はい？」

生徒と教師の垣根を越えた男と女の大事な話があるそうです。

「……………」

二人は思わず感嘆の声を漏らした。

船越女史とは40歳をすぎてもなお独身であり、最近では単位を盾に生徒たちに交際を迫つてゐる。その事から文月学園の男子生徒共通の要注意人物である。

「須川……………アンタあ男だよ！」

「ああ、感動したよ。まさかクラスの為にそこまでやつてくれるなんて！」

この場にいない須川に部隊の面子が感動にむせんでいる。なかには敬礼している人もいる。

どこからか「坂本……………」などという声が聞こえてきたが。

「まあ、いいや。コウタ改めてこくみー。」

「おしゃあー庄司ナーハー！」

その声と共に明久の召喚獣は一気に先ほどの放送に気を取られていたDクラスの生徒一人を木刀で殴りつけ、一気にふつとばす。

卷之二

「いまよ！集中攻撃！」

卷之三

明久の攻撃でふつとんだ召喚獣を美波の号令でFクラスの面子がタコ殴りにする。

۱۰۹۷

「油断したな！吉井！」

明久の召喚獣の後ろから別の召喚獣が切りかかつってきたが、それを軽くよける。

そして攻撃が空ぶつた召喚獣に「ウタ召喚獣は狙いをつけ、引き金を引く。

弾は見事に相手の胴体を撃ち抜き、仕留める。

「やつたね。」

卷之六

明久と「ウタはそいつ」とお互い腕をぶつけ合ひつ。

「よし、」の勢いを維持するよー・全員突撃ー。」

「「「おおおおおおーーーー。」」

明久の号令と共にFクラスは更に攻め込む。

## 第7問 Dクラス戦パート2（後書き）

次でDクラス戦は終了させる予定です。

そろそろバカテストもやるつかなあと考えています。

ではまた次回！

## 第8問 Dクラス戦パート3（前書き）

結構早めに投稿できました。

今後もこのスピードをできるかぎり維持したいです。

## 第8問 Dクラス戦パート3

「アキ君！大丈夫！？」

「もうちょっと耐えて！すぐに行くから！」

「もう少しだけ持ちこたえろよ！」

渡り廊下でDクラスと戦っている明久達の後ろから援軍の雄一達の声が響いてきた。

しかし距離はまだあり、合流には時間がかかりそうだった。おまけに相手をかなり倒したとはいえ明久たちの部隊も結構減らされている。最初は18人だったのがいまの人数は5人。

「援軍だ！合流される前に吉井たちを全滅させるんだ！」

「くそ！このままじゃヤバいぞ、明久！」

「コウタが焦りながら叫ぶ。

「コウタ。弾はどれくらいあるの？」

「そろそろリロードしたいな。」

「分かった。島田さん、コウタの護衛お願い。コウタは僕が隙を作るからその時にリロードを。」

「分かったわ。」

「おっしゃ、まかせとけ。」

そう言つと明久は前へ出た。

「吉井が一人で出でいるぞ…やつちまえ！」

前に出てきた明久を仕留めようと相手が襲いかかつてきただが、

「よこしょー。」

明久は召喚獣を低い姿勢にし、そのまま横つ飛びさせ、更に素通りする相手の召喚獣足をすくい転ばせる。

「（よしーこじだー）ああつー霧島さんのスカートが捲れているー！」

「「「なにいつー？」」

明久がDクラスの背後を指差して叫ぶとDクラスの男子だけでなく、Fクラスの男子やDクラスの女子までも振り返った。

「よしー。コウタ今のうちに・・・・・」

明久が振り返つて見るとコウタはリロードをせず・・・・・Dクラスの後ろを見ていた。

「コウターーーーーーーー何で君まで反応してんのさー意味ないじやん！」

「いや仕方がねえだろ！いきなりそんな事言われたら反応するの  
が男だろ！真相知ってるお前は抜いてもよ！」

「言ひ訳だ！」といふかそんな事よりも早くローラーでしょ。」

本体同士がそんな口論をしながらも「ウタの召喚獣はリロードを始めた。

「おい！藤木がリロードをしているぞー早く倒しちまうぞー。」

コウタの行動に気づいたDクラスの生徒達は「コウタを倒そう」と  
齊に襲いかかってきたが、

「わせなーん」

明久が先頭の召喚獣を思いつき木刀で殴り飛ばすと後ろの他の相手にぶつかり、そのまま連鎖的に相手が倒れて行つた。

「畠山さん！」

「まかせといてー。」

そして倒れた相手に美波が斬りかかり、一人を仕留める。

「みんなも行つてー！」でかつての見せればなのは達に褒められるかもしねないよ！」

明久の言葉にFクラスの生徒は、

！――――――

一瞬で士氣がゲージをぶつちぎり、凄まじい勢いでロクラスに襲いかかる。

「うわあ・・自分で言つといてなんだけど凄いことになつた。」

「そうね・・・・」

その光景に明久と美波はそろつて呆然と見ていた。

が、勢いは凄いのだがいかんせん点数に差があるため、

「藤信也、戦死！」

「西村雄一郎、総合残り40点です！」

「森川がやられたぞ！」

劣勢である。

そこには、

「おまたせ！アキ君！試獣召喚！」

「よしやあいくで！試獣召喚！」

「よしー！ロードが終わつたぜー！」

合流した援軍とロードを終えたコウタが参戦した。

「くわー！」は退くぞ全員遅れるなよ！」

「やせないよー。」

撤退しようしたDクラスの召喚獣になのはが光球を叩きつける。

「絶対に逃がすな！ここで一気に決めるよー。」

明久の号令に全員が攻めこもとした瞬間、

「援護に来たぞ！もう大丈夫だ！皆落ち着いて取り囲まれないように周囲を見て動け！」

Dクラス代表－平賀源治率いるDクラス本隊が援軍に来た。

「Dクラス本隊だ！予想以上に早く動いたな。」

それもそりゃう。明久達の部隊は損傷を受けたが、明久とコウタのコンビで相手の戦力をかなり減らした。

「本体の半分はFクラス代表坂本雄一を獲りに行け！他のメンバーは困まれている奴を助けるんだ！」

「「「おおーー。」」

平賀の号令にDクラス本隊のメンバーは動いたが、

「「「やせない（で）（ぜ）ーー。」」

遠距離攻撃ができるなのは、はやて、コウタの3人が弾幕を張り、Dクラスメンバーの動きを封じる。

さりに相手が動いたおかげで平賀への道が開けている。

「チャンス！」

明久はそこを見逃さず駆け出す。

「向井先生！ Dクラス吉井明久が」

「Dクラス玉野美紀、試験召喚」

「な、近衛部隊！？」

勝負を仕掛けようとした明久の前に玉野が立ちふさがった。

「残念だったな、吉井明久君。」

平賀は勝ち誇った笑みを浮かべている。それを明久は忌々しげに見ていたが、ふと片目を瞑つた。

「そうだね。たぶんこのままじゃあ僕は君を倒せない。だからー

もつたいぶつた後、

「姫路さん、どうめようじくね。」

「は？」

平賀が何を言つてゐるんだ、といつよつた顔をしていふと、

「あ、あの・・・」

その後ろから瑞希が申し訳なさそうに肩を叩いた。

「え？ 姫路をんじうしたの？他のクラスはまだ自習の時間だけど。

」

「いえ、そりじゃなくて・・・Fクラス姫路瑞希、Dクラス平賀君に現代国語勝負を申し込みます。」

「はあ、どうも。」

「あの、えつと・・・や、試験召喚です。」

そのまま平賀も召喚獣を召喚、構えるが、そのまま瑞希の召喚獣の大剣の餌食となつた。

そしてDクラス戦の決着が付いた。

## 第8問 Dクラス戦パート3（後書き）

リリカル側の召喚獣の攻撃は基本は光球を撃ち出す形になります。  
数は自由ですが。

ではまた次回！

## 第9問 Dクラス戦後（前書き）

今回はちょっと時間がかかりました。

戦後対談です。いろいろ伏線があるかもしれません。

ではどうぞ！

## 第9問 Dクラス戦後

Dクラス代表 平賀源一 討死

「…………」

その報せが届いた瞬間Dクラスからは勝鬨の声が、Dクラスからは悲鳴が上がった。

「凄えよー本当にDクラスに勝てるなんてー！」

「これで畠や卓袱台とはおさらばだなー！」

「坂本雄一サマサマだなー！」

「ああ。やっぱりあこつは凄い奴だったんだなー！」

「藤木に吉井もやつてくれたよなー！」

「姫路さん愛してこますー！」

「高町さん付き合つてくださいー！」

「何かどさくさに紛れて告白が聞こえてきたけどー?断りますー！」

「ガ————ンー！」

何やら関係ないのが聞こえてきてるが、代表の雄一や功労者の明久とコウタを褒め称える声が聞こえてきている。

「あー、まあ、そのなんだ。そう手放しでほめられると、なんつーか。」

みんなから褒められて雄一は明後日の方を見ながら照れていた。

「だろだろーー?」これが俺の本当の実力だぜーー!」

「『ウタ・・・・ちよつとは謙虚になりなよ。』

それに反し、『ウタは胸を張つて鼻を天狗にしており、明久は若干あきれていた。

「まさか姫路さんがFクラスだつたなんて・・・・信じられん。

』

その声に明久が振り向くとロクラス代表の平賀源一がヨタヨタと歩いてきた。

「あ、その、さつきはすいません・・・・

別の方向から瑞希が駆け寄ってきて源一に頭を下げる。

本来なら謝る必要はないのが、それでも瑞希は頭を下げる。

「いや、謝ることは無い全てはFクラスを甘く見ていた俺たちが悪いんだ。ルールに則つてクラスを明け渡そう。今日は時間がないから明日でいいか?」

これで彼は今後最低3ヶ月は最低のFクラスでクラスメイトに恨

まれながら過ぐす羽田になる。が、

「いや、その必要はない。」

雄一はその懸念を払拭した。

「何？」

「Dクラスの設備を奪つつもりは無いからだ。」

雄一の言葉に全員が目を丸くした。

「みんな、忘れたか？俺たちの目標はあくまでもAクラスだ。だからDクラスの設備には手を出さない。」

「それはありがたいが・・・いいのか？」

「もちろん条件がある。俺が指示したら窓の外のあれを動かなくしてもらいたいんだ。」

そう言って雄一が指差したのはBクラスのエアコンの室外機だった。

「あれか。」

「設備を壊すから教師に睨まれるだろ？が悪い取引じゃないだろ？」

まあ、そういうつづり。つまくやれば厳重注意だけですむのだから。

？

「分かつた。その提案を呑もつ。」

「そ、うか。タイミングは後で話す。今日はまもつ帰つていーだ。」

交渉は成立した。

「ああ。お前らがAクラスに勝てるよつ願つていいよ。」

「はは、無理するな。勝てつこないと思つてるんだり?」

「はは、そ、うだ。FクラスがAクラスに勝てるわけがない。アイツが居るからな。ま、社交辞令だ。」

「やつと源」は去つて行つた。

「アイツ? 誰の事だ?」

「雄一はあいつと言つ存在が気になつたが分からないので頭の隅に追いやつた。」

「さて、みんな! 今田はい! 苦労だつた! 明日は今日消費した点数の補充を行つから今日は帰つてゆつくりしてくれ! 解散!」

その言葉でみんながワラワラと帰つ支度を始めるため教室に戻つていく。

「私たちも帰つたか。アキ君。」

「そうだね。」

「今日は帰つたらゲームやゲーム。」

明久たちも帰り支度を始めるために教室に戻つていった。

「明日は・・・・・補充試験をやつて終わりかなあ。」

帰り道。フェイトは明日の予定を想像して呟いた。

「そうかもしないけど・・・・・坂本君の事だから続けてかもしれないね。」

なのはが推測を話すがなぜか全員その言葉に納得できた。

「そつか・・だつたらフェイト。勉強教えてよ。」

「え!?」

明久の申し出にフェイトはすつときょんな声を上げた。

「だつたら私も教えてほしいなーうん!」

即座になのはが割つて入つてきた。

「あ、それもそうだね。僕だけじゃああれだし、なのはとほやつのもお願いできる?」

「うん、うん、うん、うん、うん、うん。」

フロイトはしづらしく唸つたがやがて諦めたよつて頷いた。

「はあ、アキ君はほんま鈍感やな。」

それを見ていたはやはれやれとため息を吐いた。

「それじゃあ・・・てありや？」

明久はじこで鞄が妙に軽いことに気づき、中身をあわてて声を上げた。

「しまった。教科書教室に置いてきちゃつた。」

「ほんと？私の貸してあげよつか？」

「いや、それはなのはに悪いよ。今から取りに行つてくる。先に帰つてて。」

「うん、分かつた。それじゃあ先に行つてる。」

「薄情だね、わが親友よ。」

「私は甘くはないで」

そして明久は文翔学園に走つて行つた。

ガラツーふう、着いた。」

今まで走ってきたのに息一つ乱さず明久はFクラスに戻ってきた。

「よ、吉井君ー？」

「あれ？姫路さん？」

もうみんな帰ったと思っていた教室に瑞希がいた。

卷之三

そこで明久は瑞樹が座っている席に目を向けた。そこには可愛らしい便箋と封筒が置いてあつた。

（あれって……………・ラブレター・  
・・・・・かな？）

かなり間が空いたが明久はそう結論付けた。

(ふむ・・・・・ここは・・・・・・・早めに用を澄まして  
魔者は消えた方がいいね。)

「ちょっと教科書を忘れたから取りに来ただけだよ。」

そう言つと明久はさつさと自分の席に向かい教科書を鞄に詰めた。

「『めんね、驚かせちゃつて。』

「あ、いえ別に……」

「それじゃあ僕はこれで……」

そう言つと明久は教室を出て行つた。

(それにしても姫路さんには好きな人がいるのか。ここはクラスメイトとして応援した方がいいかな?まあ雄二だつたらしないけど。)

そんな事を考えながら明久は廊下を歩いていつた。

(それにしても…………好きな人か…………)

そこで明久の脳裏に一人の少女の笑顔が映つた。

「つ!／＼＼＼＼＼＼＼＼＼もうちょっと。せめて…………  
（クラス並みに勉強できないとね…………）

赤面しながら明久は呟くと早く帰るために走り出した。

## 第9問 Dクラス戦後（後書き）

こんな感じです。次回は・・・・・ついにあれが出てきます。

果たして明久たちの運命は！？

ではまた次回！感想待つてます。

## 第10問 死の料理（前書き）

ついに・・・ついにあの料理が・・・  
はたして最初の犠牲者は・・・  
ではどうぞ！

## 第10問 死の料理

次の日。明久達Fクラスは午前中に補充試験を終わらせていた。

「うあー・・・づがれだー」

明久はテストの疲労から机に突っ伏していた。

「うむ、疲れたのう。」

近くに来ていた秀吉が頷きながら答える。

ちなみに今日は髪をポニー テールにしており、より女の子に見える。それを見た空は「本当に男と見てもらいたいのか・・・・・」と額に手を当てていた。

「まつたくだよな。テストなんて疲れるだけだぜ。」

「ウタも首を「キ」キと動かしながら答える。

「よし、昼飯食いに行くぞ! 今日はラーメンとカツ丼と炒飯と力レーにするかな。」

雄一は疲れなど微塵も感じさせずに立ち上がる。

「あの、どれだけ食べるつもりですか。」

「坂本君はフードファイターでも田指しているの?」

「ところどもすでにフォードファイター並のだよな。」

「とにかくも炭水化物取りすぎや。栄養偏るで。」

上からアリサ、なのは、フロイト、はやての順に雄一の昼食内容にツッコんだ。

「ん？ 吉井達は食堂に行くの？ だったら一緒にしていい？」

「ああ、島田か。別に構わないぞ。」

「それじゃあ混ぜてもいいね。」

「…………（ノクノク）」

ムツツリーーが頷いているがおそらく下心があるだろ。

「それじゃあ、秀吉。俺たちは優子の所に行くぜ。弁当の食べさせ合いだ。」

「うむ、もうあるのかのう。」

もう三つと空と秀吉は包みを持って出て行った。

「それじゃあフロイトにはやで。これ一人の分のお弁当……。」

「

「あ、あの。嘘なん……。」

明久が一人のお弁当を取り出そうとしたところで瑞希が声をかけ

ていた。

ちなみにもう一人は昨日の「おでかけ」お弁当交換の約束を取り付けた。

「うん? あ、姫路さん。雄一たちと学食に行くの?」

「あ、いえ。え、えっと…………お毎日ですか? その、昨日の約束の…………」

瑞樹はもじもじしながら明久たちを見ている。

「あ、もしかしてお弁当の件ですか? 昨日の。」

「は、はい。迷惑じゃなかったりびつね。」

「迷感じゃないよ。ね、雄一。」

「ああ、そうだな。ありがたい。」「  
「もうですか? 良かったあ~」

そう言って瑞希はほこりと笑った。ヒヒヒヒで明久ははやてたちを振り返った。

「じゃあ一人はどこへ行く? 」

「もちろんどこへ行くよ。」

「お腹なら大丈夫や。アキ君のお弁当は別腹やからな。」

フロイトは一口と笑い、はやてはお腹を叩いて笑つた。

「…………食べ過ぎないようにしてないと…………」

なのははボソリと小さく呟いていたが。

「むー…………瑞希つて意外と積極的なのね…………」

美波は親の仇のように瑞希を睨みつけていた。

「それじゃあせつかくのじ馳走だしそお、屋上で食おうぜ。」

「そうだね。」

「ウタの提案にみんなが頷いた。

「そうか。それならお前らは先に行つてくれ。」

「へ？坂本君はどうに行くの？」

「飲み物でも買ってくる。昨日頑張ってくれた礼も兼でな。」

「あ、それならウチも行く！一人じゃ持ちきれないでしょ？」

「悪いな。それじゃあ頼む。」

「おつけー！」

「そうだ、明久。きちんと俺たちの分を取つておけよ。」

「大丈夫だつて。あまり遅いと保証できなけれど。」

「そう遅くはならないはずだ。じゃ、行つてくれる。」

もう言つと雄一と美波は教室を出て、一階の売店に行つた。

「僕らも行こつか。」

「そうですね。」

瑞希が持つっていたバッグを明久が代わりに担ぐ。

それなりの重さだが鍛えてる明久にはそれほど重くは無い。

そして明久たちは屋上に出た。天氣は青空が見える晴れ。絶好のお弁当日和である。

明久たちはシートを用意して準備をした。

「あの、あんまり自信はないんですけど……。」

瑞希が重箱のふたを取つた。

「「「おおっ……」「」」

明久たちが一斉に声を上げた。

中身はエビフライやから揚げ、エビフライにおにぎりにアスパラ

巻など定番メロコーが詰まつており、凄くおしゃれに見える。

「それじゃあ雄一には悪いけど先に——」

「…………（ヒヨイ）」

「おっ わせ——」

「ムツツリー」と「ウタはわつわとHエフライを取ると口ひびき  
込んだ。

バタン ガタガタガタガタガタガタ × 2

2人そろつて豪快に顔面から倒れ小刻みに震えだした。

「 「 「 「 「 「 「 「 「 「 「 「

残った明久たちは顔を見合せた。

「わわっ、土屋君に藤木君！？」

瑞希が慌てて配りうとした割り箸を落としていた。

「…………（ムクリ）」

ムツツリーが起き上がりグッと親指を立てた。

恐らくすくおいしかつたと伝えたいのだろう。

「あ、お口に合いましたか良かつたですう。」

「ムツツリーーの言いたい」とが伝わったのか瑞希は素直に喜んでいた。

ちなみに「ウタは震えが止まり倒れた態勢で微動だにしていない。

「良かつたらどんどん食べてくださいね。」

「「「あ、あははははははは」」

瑞希が笑顔で進めてくるが5人は乾いた笑いを上げるしかなかつた。

所変わつて△クラス。

「「はつ！！」」

「ちよ、ちよつと。いきなりどうしたのよ？」

優子の所へお弁当を食べに来ていた空と秀吉は突然何かを感じ取つたような声を上げた。

「いや、何か・・・・・その・・・・」

「なぜか分からぬが九死に一生を得た気がしたのじや。」

「ま？何言つてこのあなた達は？」

優子は一人の言葉の意味が分からず首を傾げた。

「いや、わしらにもよく分からんのじゃ・・・」

「まあ、ひとりええぞ飯食あつぜ。」

ナツコは優子のお弁当の卵焼きを口に運んだ。

「うん。うまい。うまくなつてんじやん、優子。」

「ちかしこ。やっぱ練習したかいがあつたわね。」

「窓の料理も相変わらずうまこのな。」

その隣で秀吉が窓のお弁当のかり揚げをおこしやつて食べていた。  
「ひらは平和に飯食の時間が流れていた。

## 第10問 死の料理（後書き）

本当は一気に行きたかったのですが文字数の関係と区切りよく終わつたのでここで。

ふと思つたんですが硫酸とか使つたら食材が幾らかは溶けますよね。そこで気付かないのかな。

では次回は早めに上げようと思つます。

### 第1-1問 終焉の笛（前書き）

はい、今回はかなり早く書を上げられました。  
やれぱできるんだなあ。

まあ次回からまた遅れますけど。

ではどうぞ！

## 第1-1問 終焉の笛

晴れ渡る空が見える屋上。

だがなぜだらひ。屋上の一角はぢり見ても曇天の空模様だ。

明久とのはとフュイトとはやてとアリサは顔を見合せ小声で話していた。

「ねえなのは。あれどう思つ。？」

「じう考えてもやっぱこみよ。演技にはとてもみえなこよ。」

なのはがいまだに動かないコウタに足が震えているムツツリーを見ながら言つた。

「ヒ言つよりもそんな演技をする必要がないよね。」

「アタシ、土屋さんがK.O寸前のボクサーが生まれたてのバンビにしか見えません。と言つかコウタは大丈夫なんですか。全然動きませんけど。」

「まさか・・・・・シャマルさんと同種の人なんか。瑞希ちゃんは。」

はやての言葉に明久、なのは、フュイトは顔を青ざめた。

はやは家が広いのでちよつとした寮として開放している。

家賃は月5万ほど。食事やお風呂はもちろん共同だ。今は3人の大学生が使っている。

そのなかの一人。シャマルと言う女子学生の料理は一口で意識を刈り取るほどの破壊力を秘めている。

現にそれを食べた明久たちは5時間ほどみんなして意識を失つていたらしい。（シャマル談）

「で……」これからどうします。」

アリサが聞いてきた。

「どうしますって言われても……」

「…………よし、ここは僕が行くよ。」

明久が腹をくくった顔で立候補した。

「そんな一危険すぎるよ！」

「そりやーなにもアキ君が行かんでも！」

なのははとはやでが抗議の声を上げた。

「そりやーこの中で一番体が頑丈なのは僕なんだよ？だつたら僕が……」

といひで、

「おう、待たせたな。へー」つやつまそうだな。どれどれ?」

雄一が現れそのまま素手で卵焼きを素手で掴み口にほおり込んだ。

「あ、坂本く―――」

パク  
タガタ  
バタン――ガシャンがシャン、ガタガタガタガ

ジュースの缶をぶちまけながら「これまた豪快に顔面からぶつ倒れ、  
痙攣しはじめた。

「や、坂本!…ちょっと、どうしたの!…」

遅れてやつてきた美波が慌てて雄一に駆け寄った。

「「「・・・・・・・・」」

明久たちが無言で顔を青ざめながら雄一を見ていると本人が彼ら  
を見て目で訴えてきた。

「毒を盛つたな」と。

「毒じゃないよ、姫路さんの実力だよ。」

それに対し明久も目で返事をした。

「あ、足が・・・・・・・・攣つてな・・・・・・・・」

瑞希を傷つけないよう人に嘘をついた雄一だがそれを見たアリサは

顔をしかめた。

「あははは、ダッシュで階段を駆け下りしたからじゃないかな。」

「そうだね、うそ。」

「やうなの？坂本つてこれ以上ないくらいに鍛えられてると思つた  
ど。」

「いや美波ちゃん。鍛えてても響くときは響くもんやで。」

美波の言葉にひかれてがそつ答へる。たてしなかうからどうかと事  
情を知つている4人が考えよつとした瞬間、

「それじゃあ瑞希さん。いただきますね。」

アリサが衝撃発言をした。

「あ、はいどうだい。」

「ちよ、ちよと待つてー。」

なのはが慌ててアリサを捕まえた。

「アリサちやん何言つてんのー？坂本君のとか見てなかつたのー。」

？」

「見てましたよ。だからほんのちよつとつまむ位で済ませまわよ。」

「

なのはの言葉にアリサはすまし顔で答えた。

「で、でもかなり危険じゃあ。」

「そつかもしません。ですが誰かが行かないといけないならあたしが行きます。素直に感想も言えますしね。」

「素直つて……不味いっていつの?」

「当たり前ですよ。」

アリサは当然といふ風に答えた。

「でも、それって姫路さんが傷つこうぢやうんだじや……」

明久も会話に入ってきた。

「何言つてんですか。ここで不味いって言わないといれからもあれを作つてくるんですよ?人は傷ついていくことで強くなるんです。」

「

明久はそう言い切るアリサがとてもカッコよく見えた。

「では……行きます。」

やうやくアリサはお弁当に向き直つてはしで卵焼きのほんの端っこをつまんだ。

「あれ?アリサちゃん食べる量すくないですか?」

「あ、アタシ小食なんで！」

量を不思議に思った瑞希の言葉にアリサは慌てて答えた。

そしてアリサはしばらくじつと卵焼きを見ていたが決心がついたのか口に入れた。

その瞬間、

1  
?

口を押えて後ろの倒れた。

「あ、アリサ！？どうしたのよー？」

突然倒れたアリサを心配して美波が駆け寄る。

卷之三

そのまま口を押え、バタバタと足をアリサはばたつかせた。

足が動くたびにスカートが捲れるがアリサはそんなの気にしていられない。ちなみにムツツリーはどこからともなくカメラを取り出し写真に収め、雄一は未だ回復しきれていないので見る余裕なし。明久ははやてが目隠ししていた。胸を当てるといういたずらのおまけつき。

そしてじぱりくしてアリサの動きが止まり、弱弱しく起き上がる

た。

「アリサ、大丈夫？」

「な、なんとか大丈夫です。お気遣いありがとうございます。」

アリサは心配してくれる美波にお礼を言つて瑞希に向き直った。

「すいませんが瑞希さん。言わせてもらいますが、」

「は、はい。」

「…………恐ろしく不味いです。」

アリサの言葉に瑞希はショックを受けた顔をしてうなだれた。

「ありえませんよ。あの量で意識を持つてかれかけるつて。いつたいどんな材料を使えばあんな味が・・・・・」

「…………わかりました。」

「はい？」

「これからアリサちゃんに認めてもらえるように毎日お弁当作つてきますー。」

「前言撤回。すつぐおいしかったです。改良の余地は一切ありません。このままの味を維持してください。」

まさしく前言撤回を表しているとまでもある。

「あ、そうですか。よかったです。」

そしてあつをつと信じてしまつた瑞希嬢。

「 「 「アリサ——————！」」

明久たちがアリサに詰め寄る。

「無理です！無理です！あんなの毎日食べさせられたらアタシ死んじやいます！」

田に涙を貯めてフルフルと首を振るアリサを見て明久たちもこれ以上追及できなかつた。

「いや、そもそも瑞希ちゃんこれ何を入れたの！？」

なのはが根本的な事を聞いた。

「あ、はい。卵焼きにひと工夫入れたいなあと思いまして……」

「

「思いまして……」

「硫酸を入れたぐらいです。」

次の瞬間どこからかブツ！と何かが飛ぶ音がした。

「なあ、瑞希ちゃん……ちよつといつち来てくれへん。」

はやでがゆうりつと立ち上がり手招きした。

「?、  
はい!」

それに素直に従い瑞希ははやてにひいて行つた。

そして2人はそのまま屋上のドアのある部分の裏に消えて行つた。

「はやでりやん。どう考へてもOHANASHIする氣だよね。」

「うん。  
そうだね。」

まあ、今日は瑞希の自業自得……」「

次の瞬間、

響け！終焉の笛！ラグナロク！！

極太の閃光が空に向かって伸びた。

卷之三

その場にいた意識があるもの全員が思わずギョッ！とした。

「硫酸てなんや硫酸て！あんた料理舐めどんのか！ええ！？」カラ

1

半ばヤンキー口調になりかけているはやての怒声が聞こえてきた。

それを聞いた全員が決心した。

なにがあつてもはやてだけは本氣で怒りやせまこと。

## 第1-1問 終焉の笛（後書き）

さて次回は「ピッヂ・データー」の執筆にかかりますので遅れます。  
でもできるかぎり早くするよつに努力はします。

では次回！

## 第1-2問 次のプロセスと新コンピ

「そういうえばよお雄一。次の目標。」

「ん？ 試合戦争の事か？」

「おう。」

地獄の昼食を乗り越え、明久たちは今お茶をすすっている。ちなみに意識を取り戻した「ウタはがぶ飲みしまくつていい。お茶には殺菌作用があるらしいので。硫酸の前には意味ないだろ？が。

ちなみにあの後はやは意識を失った瑞希の首根っこをつかんで引きずりながら戻ってきてみんなに恐怖を覚えさせた。

その瑞希も今は意識を取り戻しているが。

ちなみにお昼は明久たち4人のをみんなで分ける結果になつた。

「相手はBクラスか？」

「ああ。そうだ。」

「どうしてBクラスなの？僕らの目標はAクラスでしょ？」

明久たちの目標はAクラスだ。だからこそ疑問だ。

「正直に言おう。どんな作戦でもAクラスには勝てやしない。」

雄一は神妙な面持ちで言つた。

「え？ なんで？」 ひにはフロイトやアリーラさんと空、何より姫路さんがいるんだよ？

「いや、アキ君。いくら私でもAクラス、それも上位の人相手だと厳しいよ。」

「アタシもです。そもそも、Fクラスの他の戦力の人たちの事を考えるとAクラスの大半をアタシたちで相手することになりますよ。」

アリサの言葉に明久はあ、そつか。というふうな顔をした。

「それじゃあウチらの最終目標はBクラスに変更つうこと？」

「いいや。そんなことはない。Aクラスをやる。」

「雄一、さつきと言つてることが違つじやないか。・・・・・まあ、そうならないと困るけどね。」

美波の質問に雄一は答え、その答えに明久が間にに入る。しかしその後の言葉は誰の耳にも入らなかつた。

「クラス単位では勝てないと思つ。だから一騎討ちに持ち込むつもりだ。」

「え、一騎打ち？」

その言葉に明久は少し驚いた顔になつた。そしてその顔には何か

別の感情が入っているように見える。誰も気づいていないが。

「一騎討ちに…どうやってだ？」

「Bクラスを使う。」

「Bクラスを…ですか？」

「アミヒーラ、試召戦争で下位クラスに負けた場合の設備はどうなるか知っているな。」

「はい。下位クラスは負けたら設備ランクを一つ落とされるんですしたよね。」

「ああ。では上位クラスが負けた場合は？」

「確かに相手クラスと設備を入れ替えさせられるんでしたよね。」

「ああ、そのシステムを利用して交渉する。」

「交渉？」

「Bクラスをやつたら設備を入れ替えない代わりにAクラスへと攻め込むように交渉する。設備を入れ替えたらFクラスだがAクラスに負けるだけならCクラス設備で済むからな。必ずうまくいくだろ。」「うう。」

「ん、それでどうするんや。」

「それをネタにAクラスと交渉する。『Bクラスとの勝負直後に

攻め込むんだ』と言った具合にな。』

「なるほどね。』

さすがのAクラスといえども学年2番目のBクラス戦後、休む間もなく戦争ではきついだろう。

更にFクラスは今の設備にたいし不満を持っているためモチベーションは高い。しかしAクラスは勝つても何も得られないためモチベーションは低い。

そのことは明久も分かっていた。しかし彼にしか分かっていないことがある。

確かにAクラス全体のモチベーションは低いだろう。たった一人を除いては。

「でもよお。Aクラスは確実に勝つために全体の戦争をやつくる確率が高いぜ。それにー」

「それに?』

「そもそも一騎討ちで勝てんのか?姫路がこっちにいることはばれてるからよ。』

Dクラス戦のことで瑞希がFクラスにいることはすでに周知の事実だろう。ならばAクラスは必ず瑞希対策を練つてくる。

「そのへんにしては考えがある。心配するな。』

みんなが抱いている不安とは対照的に雄一は自信満々だった。「

「とにかくBクラスをやるぞ。細かいことはその後だ。でも、あ、待ってください。坂本さん。『ん、なんだアミエーラ。』

雄一の言葉を遮りアリサが入ってきた。

「Bクラス戦なんですが……アタシを明久ちゃんと組ませてください。」

「」「はあ?」「

アリサの言葉に一同目を丸くした。

「どうしてなの?アリサちゃん。」

なのはが聞く。そして美波と瑞希が軽く殺氣を出しながら明久を睨んでいる。下手な答えは即彼の死につながる確率大だ。

「はい。アタシ、点数は良い方なんですけど、操作の方が少し苦手なんです。ですから明久さんに教えてもらおうと。教えることができなくともうまい人のをまじかで見て練習をしたいんです。」

アリサの言葉にみんなが納得したように頷いた。

「だそうだけど、どうするの?アキ君。」

フヨイトが明久に向き直つて聞く。ちなみにあの二人ははやとなのはが牽制している。

「そういうことだつたらいいよ。役立つかどうかは分からぬ  
どね。」

明久は快く承諾した。それと同時に美波と瑞希が立ち上がりかけたがすぐに幼なじみ2人に押えられる。

「はい。ではよろしくお願ひしますね。明久さん。」

「うん。よろしく、アミエーラさん。」

ここに新しいコンビが誕生した。

ちなみに宣戦布告は最初明久にやらせようとしたがなのは達の殺氣で雄一本人が行つた。

第1-2問 次のプロセスと新「ハンビ」(後書き)

最近残業が多く疲れています。だれか俺に癒しを(泣)

だけどめげずに頑張ります。

第13問 Bクラス戦パート1（前書き）

### 第13問 Bクラス戦パート1

「さて皆、総合科目のテスト」苦労だつた。」

教壇に立つた雄二が机に手をついてFクラスの面子を向いて言つ。  
弁当騒動の次の日。ついにわざ全科目のテストが終わり、昼食を  
取つた所である。

「午後はBクラスとの試合戦争に突入する予定だが、殺る気は充  
分か?」

「「「おおーー!」」」

モチベーションは一向に下がらない。点数が低いFクラスの唯一  
の武器だろう。

「今回の戦闘は敵を教室に押し込むことが重要になる。その為開  
戦直後の渡り廊下戦は絶対に負けるわけにはいかない。」

「「「おおーー!」」」

「そこで前線には姫路瑞希に指揮を取つてもらひ。更に空、ハラ  
オウン、アミエーラと明久のペアは前線で暴れてもらひ。」

「が、頑張ります。」

「了解つと。」

「まかせて。」

「わかりました。」

女子と一緒に戦えるだけに前線部隊の士気は最高潮に達していた。

今回の廊下の戦闘は絶対に勝ちに行くらしく戦力は空たちAクラス並だけでなくFクラス50人中40人はつぎ込むようだ。

キーンコーンカーンコーン

昼休み終了のベルが鳴り、ついにBクラス戦が始まる。

「よし、行つて来い！ 目指すはシステムデスクだ！」

「「「サー、イエッサー！」」「

この戦いで重要なのは敵を押し込むこと。明久たちは全力でBクラスへと向かう廊下を駆け出した。

今回のFクラスの主力は数学だ。Bクラスは文系が比較的多いことと長谷川先生の召喚範囲が広いことからだ。他にも英語のライティングの山田先生と物理の木村先生もいる。

「いたぞ、Bクラスだ！」

「高橋先生を連れているぞ！」

正面からゆっくりとした足取りでBクラスのメンバーが歩いてくる。人数が10人程度と言うところを見ると様子見のようだ。

「生かして帰すなー！」

物騒なセリフと共にBクラス戦が始まった。

Bクラス 野中 長男 VS Fクラス 近藤吉宗

総合 1934点 VS 764点

Bクラス 金田一裕子 VS Fクラス 武藤啓太

数学 159点 VS 69点

Bクラス 里井真由子 VS Fクラス 君島博

物理 152点 VS 77点

だがFクラスの面子はその圧倒的な戦力差に次々と止めを刺されていく。

「やつぱりマズいですね。行きましょう、明久さん！」

「OK、アミラーさん！」

「「試獣召喚！」」

明久とアリサは同時に召喚する。

魔法陣から改造学ランに木刀と言う装備の明久の召喚獣、そしてミニスカートにヘソ出しノースリーブの服に帽子、そして身の丈ほ

ゞの巨大な剣と重い装備のアリサの召喚獣が表れた。

Fクラス吉井明久&アリサ・イリー＝チナ・アミエーラ

数学 82点&230点

「なんだ女子の点数！？」

「本当にFクラスなのか！？」

アリサの点数にBクラスの面子が動搖する。

「それじゃあ・・・・イメージとしてはラジコンを動かしている感じで。頭にリモコンを思い浮かべてそれで操作するよ！」してみて。危なくなつたらフォローするから。」

「分かりました。では！」

そう言つとアリサの召喚獣は敵に向かつて駆けて行つた。その後ろを明久の召喚獣も付いて行く。

「えーーと・・・・ひー！」

アリサの召喚獣が大上段に剣を振り上げ一気に振り下ろす。

だが動きがかなり大雑把だからか相手は簡単に避け、その隙を狙つてアリサに攻撃を加えようとするが、

「やせないよ。」

明久の召喚獣が相手を思いつきり殴り攻撃を阻止する。

「そこです！」

そこにアリサが剣を振る。

明久の召喚獣は即座にその場から退避し、切り裂かれたのはBクラスの生徒の召喚獣だけだ。

「どう?」

明久がアリサに感触を聞く。

「そうですね……。まだまだです。もうちょっととお願いします。」

「分かった。」

とそこへ、

「お、遅れ、まし、た……。ごめ、んな、さい……」

「「」めんアキ君。瑞希に付き合つて!。」

「遅れた分は取り返すぜ。試獣召喚<sup>サモン</sup>…」

遅れた瑞希にそれに付き合つていたフュイトと空が合流し、空が召喚する。

コバルト色で背に狼のエンブレムが刻まれた上着に黒に所々コバ

ルトがあしらわれたズボン。そしてアリサのより巨大な片刃の大剣を持った空の召喚獣が現れた。

Fクラス 青葉空 数学 210点

「なつ！？あいつも点数高いぞ！」

「私も行くね。試験獣召喚！」

続けてフェイトが黒い服に白いマントを羽織り、金色の刃をした鎌のような杖を持った召喚獣が現れた。

Fクラス フェイト・T・ハラオウン 数学230点

「また200点台！？」

「いつたいどうなつてんだ！？」

Bクラスは次々と現れる高得点者に動搖を隠しきれない。

「おいおい、そんな動搖していいのか？」

その隙をついて空の召喚獣は一気に間合いを詰め大剣で相手の召喚獣を一刀両断する。

「くそ…高得点者は一人で当たれ！」

Bクラスの指揮官が叫ぶとBクラスの面子はその言葉道理に空、フェイト、アリサに一人係で挑んでくる。

「ちひ、 いれはちひと・・・・・」

「そうだね・・・・・」

空とフュイトは唸つた。

確かに一人はAクラス並の点数だが、それでも200点台前半だ。Bクラス相手だと1対1なら余裕だが、1対2になると厳しくなる。

と、

「フュイトちゃん、 手伝うよー・

「援護するでー・空君ー・」

そこにはやてとなのはが入った。

Fクラス 高町なのは 数学222点

Fクラス 八神はやて 数学156点

「また!?」

「一体どうなってるんだ!?」

「ありがとう、なのは。」

「助かつたぜ、八神。」

二人はそれぞれのパートナーに礼を言つて戦闘に集中する。

ちなみにアリサ、明久ペアは、

「…」

アリサ召喚獣が剣を切り上げから切り下しの攻撃をする。

たどたどしい動きに相手の召喚獣は初手を避け、次も避けようとするが、

「よつと。」

明久の召喚獣の足払いで転倒し、そのまま、アリサの召喚獣の攻撃をくじつ。

「よし、前線は…・・・・・だいぶ安定してきたね。」

「そうですね。」

明久とアリサは前線の様子を見て呟いた。

「明久、アミヒーラ、わしらは教室に戻るぞ。」

「へ？」

「なんですか？」

その二人のところに秀吉がやつてきた。

「Bクラスの代表じゃが…・・・・・」

「うん。」

「あの根本らしー。」

「根本つてあの根本恭一ー？」

「うむ。」

その言葉にアリサは不快そうに眉をひそめた。

根本恭一。恐ろしく評判が悪いことで有名だ。カンニングの常連だと、球技大会で相手に一服盛つたとか喧嘩に刃物は当然装備などだ。

「なるほど。戻つておいたほうがよさそうだね。」

「雄一に何かあるとは思えんが念のためにの。」

「だつたら早く戻りましょ。」

そして3人は指揮をとつていた瑞希に報告して教室に戻つていった。

### 第13問 Bクラス戦パート1（後書き）

戦闘は核となる人たちをピックアップしながら書いて行こうと思  
います。

## 第14問 Bクラス戦パート2（前書き）

連日投稿！やればできる俺！

でもおかしいところあるかもです。描描どんじんお願いします。

ではどうぞ！

## 第14問 Bクラス戦パート2

「うわ…………」つや 酷い。」

「まさか」「うぐるとほのひ。」

「卑怯ですね。」

教室に戻ってきた明久たちが見たのは六だらけになつた卓袱台にへし折られたシャーペンや消しゴムだった。

「酷いね。これじやあ補給がままならない。」

「うむ、地味じやが点数に影響が出る嫌がらせじやな。」

「ていうか…………根本さんつて器が恐ろしく小さこよつな気が……」

アリサがあきれたよつに言つた。

「あまり気にするな。修復に時間はかかるが作戦に大きな支障はない。」

そこに雄一が入ってきた。

「雄一がそつまつならいいけど…………ていうかなんで雄一は教室がこんなことになつているのに気付かなかつたの？」

昼休みまではいつも通りだつたはずだから戦闘開始から今まで間

にやらされた嫌がらせだろう。雄一はあの後教室にいたはずだから嫌がらせをやられたら気付かない方がおかしい。

「協定を結びたいと申し出があつてな。調印の為に教室を空にしていた。」

「協定・・・ですか？」

「ああ。4時までに決着がつかなかつたら戦況をそのままにして続きは明日の午前9時に持ち越し。その間は試召戦争にかかる一切の行動を禁止する。つてな。」

「それ、承諾したの？」

「そうだ。」

「でも、体力勝負に持ち込んだ方がウチとしては有利なんじゃない？」

「姫路以外は、な。」

その言葉にみんなが納得した。

このクラスにはAクラスレベルが姫路を除いても3人はいる。

しかし、もしもの時に備えて万全にしておいても損はない。

「あいつ等を教室に押し込んだり戦闘は終了だろ？。」

「そうなると作戦の本番は明日じゃな。」

「まあ、しかたないですね。」

そんななか明久は不信感を持つていた。

確かにこの協定を結めばこちらにメリットはある。しかし教室の設備を破壊した男がこちらが有利になる協定を結ぼうとするだろうか。そこが気がかりだった。

「明久、アミエーラ。とりあえずわしらは前線に戻るぞい。向こうでも何かされてるかもしれん。」

「そうですね。行きましょう、明久さん。」

「う、うん。」

明久たちはそのまま教室を出て行つた。

「まだ何かしてくるかもしれないから秀吉、気を付けてね！」

「うむ、そっちもな！」

「大丈夫ですよ。いざとなつたら明久さんが守ってくれますから。」

「へー？」

「何驚いてるんですか。女の子を守るのは男の子の役目でしょ。」

そう言つとアリサはいたずらっぽく笑つた。ちょっとした軽口だ。

「はいはい！」

それに明久は答えると部隊に戻つていった。

「明久、アミエーラー！戻つて来たか！」

二人の接近に気づき、声を上げたのは空だ。

「待たせたね！戦況は？」

「マズイことになつちました。島田が人質になつた。」

「なつー？」

その言葉に明久とアリサは同時に声を上げた。

「そのせいであつちは残り2人なのに攻められへんでにらみ合いの状況や。」

空と組んでいたはやてが説明した。フェイトとなのほのペアは見当たらない。恐らく別の部隊の援護に向かつたのだろう。

「とりあえず状況を確認したい。前に行つても大丈夫？」

「ああ、こつちは飛び道具を使えるからいざとなつたら援護する。」

「

空が前を歩いてその後を2人が続く。

Fクラスの部隊の人垣を抜けるとBクラスの生徒と捕えられた美女及び召喚獣の姿があつた。

「島田さん！」

「よ、吉井！」

「そこで止まれ！それ以上近寄るなら召喚獣に止めをさしてこの女を補修室送りにするぞ！」

あえて戦死にはせず人質にしてFクラスの士気を挫く作戦らしい。そして状況をみて吟味して明久が出した答えは、

「総員突撃！！！」

「マジですか！？」

突撃だった。アリサが普段使わないような言葉を使った。

「ま、待て、吉井！」

敵からの言葉に明久の動きが止まる。

「（）いつがどうして俺達に捕まつたか分かるか？」

「？」

明久は首を傾げる。

「ここつ、お前が怪我したって偽情報流したら部隊離れて一人で保健室に向かつたんだよ。」

「え！？・・・・・・・島田さん。」

「な、なによ」

「怪我をした僕に止めを刺しに行くなんてアンタは鬼か！」

「違うわよー。」

「…………いや否定できませんね。」

アリサの放った言葉に全員が目を丸くした。

「な、アリサ！アンタ何言つてー。」

「いや、趣味が明久さんを殴る」と聞いて聞いたらその考えに嫌でも結びつきますよー。」

アリサの言葉に思わず全員が納得してしまった。

それで心配してくれるとと思つた人は恐らくドミだらつ。

「まあ、それは置いといて、明久さん、このままでは美波さんは補修室に送られますよ。」

「一へアミーハーちゃんはあの島田さんが本物だつてこいつのー？」

「あ、偽物つて事前提だつたんですね。」

アリサはあはは、と乾いた笑いを浮かべた。

「うん、 そうだけど?」

「まあ・・・・・・・その、 言わせてもらいますけど」本人の偽物はまあ、ぶっちゃけ用意できるでしょうけど「ちょっと、アリサ！」召喚獣の偽物は用意できませんよ。」

その言葉に明久はあ、と声を上げた。

その人の召喚獣はその人にしか召喚できないもし仮に美波が偽物だとしても召喚獣の方は本物の為止めを刺されれば美波本人は補修室行き決定だ。

「じゃあ・・・・・・どうする?」

「う～～～ん・・・・・・・ん? 今の教科は英語Wですか・・・・・・・ではアタシが行きます。試験召喚<sup>サモン</sup>」

そう言つてアリサは召喚獣を呼び出す。そしてその剣を変形させる。

刀身が引っ込んでその代りガトリング砲の銃身が現れ、持ち手が変わり、巨大な銃になつた。

「ま、まさか・・・・・・」

その後の行動が予想できたのか美波の顔が青ざめる。

「『』めんなさい、美波さん。骨は拾いますね。ホーミングレイ。」

次の瞬間銃口から紫のレーザーが無数に飛び出した。

「な！？」

「うそだろ！？」

「アリサのバカ……！」

Bクラス並びに美波の絶叫が響いた瞬間、レーザーは器用に美波の召喚獣を避け、Bクラスのだけを撃ち抜いた。

「へ？」「へ？」「へ？」「へ？」

その場にいた全員が呆けたような声を出した。

Fクラス アリサ・イリーチア・アミエーラ 英語W 400点

「アタシの腕輪の能力はホーミングレイ。敵だけを自動で追尾してくれるレーザーを放つんですよ。」

「へ、へえ。」

得意げに胸を張るアリサを見て明久は感心するしかなかつた。

まあ、なにはともあれ美波を無事救出出来た。

「ちよつと、アリサ！」

攻撃にさしかかけた美波がアリサに詰め寄る。

「すいません、美波さん。ですが敵をだますにはまず味方からつて言つじやないですか。下手に教えて、それでばれて変な対処されるよりはマシでしょ？」

「ま、まあ・・・・・・所で吉井はウチを最初から偽物だつて思つてたわけ？」

「いや、ちよつと、島田わん。殺氣を押えて。」

「待つてください。そもそも、美波さんが戦線を離れなければこんなことにはなりませんでしたよ。」

「なー」アリサはさじこまで吉井の肩を持つのみー。」

「アタシはあくまでも事実を言つてるだけです。」

その言葉に美波は押し黙る。

「とは言え、最初から偽物と断定していた明久さんにも非はありますし・・・・・・・そうですね、ここは妥協案としてお互い相手の言つひとを一つ何でも聞く。これで手を打つてはどうでしょうか。」

その言葉に明久と美波は目を丸くした。

「ま、まあそれなら良いくわよ。」

「まあ、僕もそれで無事で済むならいいけど・・・・・・僕何も命令するような事ないよ。」

「ウチはあるわ。吉井、これからウチはアンタの事をアキッて呼ぶわ。だからアンタはウチの事を美波様と呼びなさい。」

「対等じゃない！」

流石に予想外だったのかアリサは目を丸くした。

「冗談。美波って呼びなさい。」

「う、うん。分かった。」

そして4時になり、この日の戦争は終了となつた。

## 第14問 Bクラス戦パート2（後書き）

いや、あれはある意味当然だと思います。

あと、アリサって結構物事をズバズバ言う感じがするので。

では！

## 第15問 Bクラス戦パート3（前書き）

連日投稿もう一つちょう！

ちょっとBクラス戦は書きたい場面があるので頑張っています。  
ですがそろそろ「ソッドイーター」も書かなければいけないのでつぎ連  
日できても1話が限界ですね。

ではどうぞ！

## 第15問 Bクラス戦パート3

「ただいま」

戦闘終了後明久たちは教室に戻つて来ていた。

「アキ君、はやてちゃん。お帰り。」

「二人とも大丈夫だった？」

一足早く帰つて来ていたなのはBフェイトが明久とはやてに駆け寄つた。

「うん、大丈夫だよ。」

「全然平氣や。なんならこれからBクラスに一人で突つ込んで行つてもいいで。」

明久は素直に、はやては冗談交じりで返した。

「なあ雄一。今のところは作戦通りでいいのか？」

頭の後ろで手を組みながらコウタガ聞く。

「ああ。今のところは作戦通りだ。ただこちらの損害が大きいな。明日は空たちが頼みの綱だ。」

「了解。」

空は氣だるげに返した。ビニが異をついた雰囲氣も漂つている。

「…………（アントン）」

「あ、ムッシニー。何か変わったことはあったか？」

そこには諜報活動から帰ってきたムッシニーが雄一の肩を叩いた。

「ん？ じクラスの様子がおかしいだと？」

「…………（ロクコ）」

Aクラス相手に戦おうとは思っていないだろ？ から田代は、話によるどびやひじクラスが試合戦争の準備をしているらじこ。

「漁夫の利を狙つもつか。いやらじこ連中だな。」

この戦争で勝つたクラスを相手に戦つもつだ。疲弊していくは勝つの難しい。

「雄一、どうする？」

「んー、もうだな。」

唸つた雄一は時計をちらりと見る。現在時刻4時半。それほど遅い時刻ではない。

「じクラスと協定を結ぶか。Dクラスを使って攻め込ませるぞ、とか言って脅してやれば攻め込む氣もなくなるだろ？ 」

「それに僕らが勝つとは思っていないだろ？しね。」

「それなら早く行こうぜ。」

「そうですね。」

「そう言つて雄一、明久、コウタ、アリサは立ち上がつた。4人が行くらしい。」

「秀吉はここに残つていってくれ。」

「ん？なんじゃワシは行かなくとも良いのか？」

「お前の顔を見せると万が一の場合にやれりつとしている作戦に支障があるんだな。」

「よくわからんが雄一がそういうのであれば従おう。」

素直に秀吉は引き下がる。空は雄一の作戦と言ひ言葉になぜだか嫌な予感を感じた。

「じゃ行こうか。人数少なくて不安だけど。」

そして4人はCクラスに向かった。

「Fクラス代表の坂本雄一だ。このクラスの代表は？」

Cクラスの教室にはまだ結構な人数が残っている。

「私だけど何か用かしら？」

明久たちの前に出てきたのはまじりつけのない黒髪をベリーショートにした気が強そうな女子、小山友香が前に出た。

その女子を見た気がしてコウタは頭をひねった。

「ちよつと話したいことがあつてな。」

「話？ 内容は？」

「ああ、Fクラス代表としてクラス間交渉に来た。時間はあるか？」

「クラス間交渉？ ふうん・・・・・・

友香はどこかいやらしい笑みを浮かべた。それが明久は引っかかるつた。

「ああ、ふ「ああ―――――！ 思い出した――」どうしたコウタ？」

雄一の言葉を遮るほど音量でコウタが叫んだ。

「」いつ根本の彼女だ！ 去年」いつが根本と親しげに話してたの見てクラスの面子に来たら付き合つておつて言つてた！」

「なに――？」

その言葉に明久たちは驚愕し、友香は恥々しそうに顔をしかめた。

そしてアリサは即座に教室内を注意深く見た。そして、

「いました！根本さんにBクラスの生徒です！」

アリサが教室の一角にいた根本たちを見つけた。

「協定違反を理由に攻めるつもりだったんだね。」

「危なかつた。あと少し『ウタガ』が思い出すのが遅かつたら間に合わなかつたな。」

「ふう、何とかなつたぜ。」

雄一はあくまでもクラス間交渉に来たと言つた。試召戦争関連はまだ言つていない。屁理屈かもしけないがそれでも十分通る。

「くそー」うなつたらお前らやつちまえ！

すると根本は生徒に攻めるように命じた。

「なー!? 根本君それは立派な協定違反だ！」

「知つたことかー！」

「ちつーーー！」は逃げるぞー！

雄一の言葉と共に明久たちは教室から飛び出した。その後をBクラスの生徒が追つてくる。

(くつ、このままじゃあマズイな。なにか……………。  
ん?あれは日本史の……………なら)

次の瞬間明久は走るのをやめるとBクラスの生徒に向き直った。

「雄二ーー!」は僕が時間を稼ぐから先に行つて!」

「な、何言つてんだよ明久!」

「危険すぎます!アタシも残ります!」

「ウタとアリサが叫ぶ。

「雄二ー、早く!」

「……………大丈夫なのか?」

「もちろん!」

「……………分かつた行くぞ、ウタ、アリエー

ラ。」

「なんだと!雄二テメエ!」

「明久さんを見殺しにするつもりですか!?!?」

「ウタとアリサが雄二に喰つてかかる。

「本人が大丈夫だつて言つてるんだ。」こは信じるぞ。」

「ですが……」「早くー。」~~~~~わかりましたー！でも  
やんと帰つてくるんですよー。」

「じゃなかつたらお前の座布団に画鋲仕込んでやるからなー。」

「わつわつと雄一たちは先に走つて行つた。

「おい、バカの吉井が一人で立つてゐるぞ。」

「わつわとぶち殺すぞ。」

Bクラスの生徒は余裕の表れか、足取りを緩めた。

その生徒に向かつて明久はゆつくじと笑みを浮かべた。

「選択科目を誤つたね。」

「「は？」」

「あ…………工サの時間だ。」

「ただいま～～～」

明久はのんびりとした口調で教室に戻ってきた。と、

「アキ君！」

となのはが飛びついてきた。

「うわ！」

明久はひっくり返りそうになるがなんとか堪える。

「大丈夫だた！？怪我とかしていないよね！」

そう言つとなのは明久の体をぺたぺたと触りだした。

「だ、大丈夫だよ。そもそも試召戦争で怪我なんかしないよ。」

「そ、そつか・・・・・・でも無事でよかつた。」

「なのはは心底安堵したように息を吐いた。

「まったく、アキ君は無茶しすぎだよ。」

フヒイトも割つて入つてきた。本当は彼女も明久に抱きつきたい  
ところだったのだがここはなのはに譲つたらしい。

「勝てたんですか？明久さん。」

そこにアリサも入つてきた。

「まあ、相手が同時に襲いかかってきたから骨が折れたけど何とか……」

「まあ、無事でよかつたわ。」

はやても明久の無事を喜んでいた。

「あ～～～お前らひょつといいか？」

「「「ん?」「

雄一が声を上げた」とみんなが雄一を向いた。

「こうなった以上このクラスも敵だ。同盟船が無い以上は連戦と言ふ形になるだろ?が正直Bクラス戦の後にこのクラス戦はきつい。」

「じゃあどうかのままじゃあ勝つてもこのクラスにやられるや。」

「心配するな。向こうがそう来るならこちらにも考えがある。」

雄一はどこか自信たっぷりに告げた。

「考えだあ?」

「ああ、明日の朝に実行する。明日は田を、だ。」

そしてその日は解散となり続ければ明日は持り越しこなつた。

明久宅

「まさかそうくるとはね、根本君・・・・・・・・・・・・  
でもねそはさせないよ。」

そう言つと明久は携帯で誰かに電話をかけた。

## 第15問 Bクラス戦パート3（後書き）

はてさて結構伏線があります。

ネタバレ、これはAクラス戦ではつきりします。

では次回！

## 第16問 Bクラス戦パート4（前書き）

連日投稿最終！

明日からはゴッディーターを書きはじめます。

しかし、人間やればできるもんですね。

ではどうぞ！

## 第16問 Bクラス戦パート4

「昨日言っていた作戦を実行する。」

翌朝登校した明久達に雄一は開口一番にしゃつ告げた。

「作戦? でも開戦時刻はまだだよ?」

今時間は午前8時半。開戦時刻は9時だから確かに早い。

「Bクラス相手じゃない。Cクラスの方だ。」

「なるほどな。で、何やるんだ?」

「秀吉のれを着てもいい。」

そう言つて雄一が取り出したのは同じ文翔学園の女子制服だ。

「すいません。それどこから調達したんですか?」

アリサが完全に呆れて聞いた。

「細かいことは気にするな。」

「雄一は気にした風もない。」

「それは別に構わんがわしが女装をしてどうするんじゃ?」

「いや、そこは構おうぜ秀吉ー。つづかお前本当に男として見ても

らいたいのか…？」

空が大きな声でツツツとむ。

「秀吉には木下優子としてアクラスの使者を装つてもらひ。」

「いや、まあ……確かに一人はかなりそつべつだけじよお、そつかいびつするんだだ？」

「そつからはまあクラスを挑発してくれればいいんだ。」

その言葉に空は納得していよいよ顔をしかめた。

「大丈夫じゃ空。姉上も最近性格が丸くなってきたじゃねつ。だから滅多な事では怒らんよ。」

「…………ひなみにじんな」とを言おうとしたところへ。

聞いた空に秀吉は耳打ちをする。

次の瞬間空は秀吉の肩をがつちつと掴んだ。

「だめだ秀吉。そんな事を優子として言つてみや。お前間違いなく優子に殺される。」

「え、いや、じゃが姉上ならそれくらいは……」

「とにかく言つたそれだけは。いくら丸くなつたとしても間違いなくブチ切れる。」

セツヒツと空は雄一に向き直った。

「その案は却下だ。幼なじみとして秀吉を危険にはねりたせるとは出来ない。」

「いや、だがそうなるとだな……」

「だつたらこのクラスは俺一人で相手する。腕輪を使えば十分に行ける。」

空は毅然とした態度で言い放つ。

「ぐ、むむむむむ。」

雄一は空が決して折れないということを感じ取ると唸つた。

と、廊下を覗いていた明久が、

「ねえ、いまこのクラスに誰か入つていつたよ。ちょっと見に行つてみない。」

と言つてきた。

「何言つてるんだ明久。どつせクラスの生徒だろ。そんなの見に行つてどつするんだ。」

「まあまあ行つてみようよ。もしかしたら他のクラスの生徒が宣戦布告を行つたのかもしれないよ。」

明久の言葉に雄一は唸る。

確かにひょっとしたらEクラスがやるといつ可能性は捨てきれないと確率は恐ろしく低いし、勝つ確率も低い。そんなのに頼るぐらいいなら確實にCクラスをどうにかできる方法を出す。しかし、空がこの調子では作戦が出来ない。

「まあ、頭を切り替える意味で行くか。」

「うんじゃあ決まりだね。行こうか。」

そう言つと明久と雄一はCクラスに向かつた。

近くに来ると話し声が聞こえる。

雄一はだるそうに耳を立てている。が、

「俺達AクラスはCクラスに宣戦布告を行つ。」

「」「なー?」「

「ー?」

その言葉に目をむいた。

「な、なんでAクラスが!?」

「そんなのこっちの事情だ。いちいち話してやる義理はない。時間は10時からだ。忘れるなよ。」

その言葉と共にCクラスから一人の生徒が出てきた。

褐色の肌に白い髪をした少年だ。

その少年は一いち見るとわざと唇のはじを上げた。

それを見た明久は同じように唇のはじを上げた。

そのままその生徒は歩き去つて行った。

「まさかAクラスが宣戦布告をやるとはね。でもこれでCクラスは抑えられたね、雄一。」

「あ、ああ。そうだな。」

雄一はあまりに想定外の出来事にいまだに衝撃から抜けきっていないかった。

「ドアと壁をつまく使つんじゃ！ 戰線を拡大させるでないぞ！」

秀吉の指示が飛ぶ。

その後午前9時にBクラス戦が開始され、明久達は中断された位

置、Bクラスの前から進軍を始めた。

作戦内容は敵を教室内に押し込むこと。

そして作戦を実行せよ!としているが一つ問題がある。

なぜか総司令官である瑞希が一言も指示を出す気配がないのだ。

「勝負は極力単体強化で挑むのじゃ!補給も念入りに行え!」

いま指示を放っているのは副司令官の秀吉だ。

「左側出入口、押し戻されています!」

「古典の戦力が足りない!援軍を頼む!」

「のままでは突破されるのは時間の問題だ。」

「姫路さん、左側の援護を!」

「あ、そ、その……」

明久は瑞希に指示を飛ばすが当の本人は戦線に加わらず泣きそつた顔をして、オロオロしている。

「くそーアリーラさん行くよー!」

「いや、無理です!アタシ古典40点しかないんですよー!」

「うそー?」

明久は思わず目を丸くした。

その隙に、

「突破はさせないよ。」

なのはが割り込んだ。

「『めんなのはー助かつた!』

「どういたしまして!」

「なのは、手伝つ!」

更にそこにフェイドも加わり戦線を保つた。

「姫路さん、どうかしたの?」

その隙に明久は様子がおかしい瑞希に声をかける。

「そ、その、なんでもないんです。」

「何でもなくないですよ。どう見たって様子がおかしくなります。」

そこにアリサも加わる。「この原因をはつきりさせない事にはどうしようもない。」

ついでに聞いたりとしたといいで、

「右側出入り口、教科が現国に変更されました！」

「数学教師はどうした！」

Bクラス内に拉致された模様！」

右側がBクラス得意科目に切り替わり、明久たちはかなり追い詰められた。

「私が行きます！」

そう言つと瑞希が戦線に加わろうと駆け出した。が、

「あ・・・・・」

急にその動きを止めてうつむく。

不審に思ったアリサがその方向に目を向けると、

「明久さん、あそ！」。

普段よりもずっと冷たい声に明久は素直にその方向に目を向ける。

そこには窓際で腕を組んでこちらを見下ろす根本がいた。そしてその手にはなにかが握られていた。

それに明久は見覚えがあつた。

それは3日前に明久が見かけた封筒だ。

「…………なるせじね。」

明久も恐りしう低い声で呟く。その声には明らかに怒りが含まれている。

「姫路さん。」

「は、は……」

「具合が悪そうだからあまり戦線には加わらないよつ」。試合戦争はこれで終わるじゃなくから体調管理は気を付けてね。」

「…………はい。」

「じゃ、僕等は用があるからー。」

「あ…………！」

「空さん、はやてさんー右側の出入口をお願いしますー。」

「まかせとわー。」

「あこやー。」

そして2人はその場から走り出す。

「面白に轟してくれるじゃないか、根元君。」

「ええ、そりですよね。ソラ君でやつてくれたんですからちよつとお礼でもしますか。」

そういつと明久とアリサは互いの手を叩いた。

「じゃあ、やうつか、相棒。」

「ええ、そうですね、パートナー。」

「あの野郎（の人）ぶち殺す（許さない）」

## 第16問 Bクラス戦パート4（後書き）

さて、Bクラス戦最終の予定は・・・明久、アリサコンビ  
+ が本気で行きます。

ではまた！

## 第17問 Bクラス戦パート5（前書き）

今回でBクラス戦は終了です。

明久の本気の実力が明らかに・・・・・

ではどうぞ！

## 第17問 Bクラス戦パート5

「「雄一（坂本さん）！」」

「うん？どうした明久にアミエーラ。脱走か？チヨキでシバくぞ。  
明久だけ。」

「なら僕は鼻を裏拳でそき落としてあげるよ。」

「話がずれそうですよ、明久さん！」

教室に飛び込むなり雄一と物騒な話をする明久をアリサが落ち着ける。

「話があるんです。」

「聞こつか。」

最初こそジョークを言つていた雄一だが一人のただならぬ雰囲気に真面目な顔をする。

「根本君の制服が欲しいんだ。」

「・・・・お前に何があつたんだ？」

「明久さん！それじゃあただの変態です！」

アリサが慌ててツツコむ。

「まあいいだろ。処理の曉にはそれくらいなんとかしてやれ。」

「受け入れちゃダメです、坂本さん…」

今回、アリサは大忙しである。

「それと、姫路さんを戦闘から外してほしい。」

その一方で明久はそんなの一人のやり取りや自分の言ったことなど知ったことかと言いつ風に話を続ける。

「理由は?」

「いえ、言えません。」

「どうしてもなのか?」

「どうしても(です)」

一人は声をそろえて言う。

それに雄一は顎に手を当けて考え込む。

これはかなり重大な問題だ。Bクラスを瑞希抜きで戦うなど、かなりの戦力ダウンにつながり、負ける確率がかなり上がる。

「……条件がある。」

「条件?」

「姫路が担う予定だった役割をお前らがやるんだ。必ず成功させ  
る。」

「それくらいーー。」

「もちろんやってみせるよー。」

「いい返事だ。」

一人は自信満々と叫びついで頷く。

「それであたしたちは何をやればいいんですか？」

「タイミングを計つて根元に攻撃を仕掛ける。科田は何でもいい。」

「

「皿のフオローは?」

「ない。しかもBクラス教室の出入口は今の状態のままだ。」

「厄介な注文ですね。」

アリサは顔をしかめた。

しかし、その隣で明久は少し思案顔をするとい

「分かった、やるよ。」

そう言った。

「そうか、それじゃあつまくやれよ。」

「うひとじと雄一は教室を出て行ひ立上がる。

「ちよつといでいかいくんですか？」

「Dクラスに指示を出してくる。例の件でな。

例の件とは室外機の件だ。

だが、

「必要なじよ、雄一。」

「は？」

アリサと雄一の声が重なる。

「そんなことしなくても…………僕が奴を喰い裂いてやるから。」

「うこうとうと明久は笑った。まるで田の前に獲物を見つけた獣のよ

うひ。

「それで明久さん。どうするんですか？」

Bクラスへ向かう途中でアリサは明久に作戦内容を聞いた。ちなみに日本史の先生はすでに捕まえている。

「単純。僕がBクラス内にいるBクラスの生徒全員に日本史で勝負を仕掛ける。アミエーラさんは援護をお願い。」

「そ、そんな！無茶です！」

アリサは文字通り目を剥いた。

Bクラスはまだかなりの生徒が残っている。いまはその大半が教室内にいる。どう考へても援護があつたとしても突破は無理である。

「それに、アタシはまだ召喚獣の扱いが……」

「大丈夫だよ。アミエーラさんなら大丈夫。自分を信じて。」

明久はまっすぐにアリサの目を見て言った。

そこには確かな信頼がある。それを見てしまつたら答えない方が申し訳がない。

「…………わかりましたよ！ただし！外れても責任は取りませんよ……」

「OK! じゃあ、頼むよ！」

そうして二人はBクラスにたどり着いた。

そしてFクラスの生徒の間を縫つてBクラス内に入ると、

「Fクラス、吉井明久！」

「Fクラス、アリサ・イリー・チナ・アミエーラー！」

「教室内にいるBクラス生徒に日本史で勝負を挑みます！！」

「 はあ？」

教室内にいたBクラスの生徒は全員呆けたような声を上げた。

「はは、お前らバカか。この数を相手に2人で勝てるわけがないだろう。」

代表の根本は一人を見下すように笑う。

その声を無視して魔法陣から一人の召喚獣が現れ、点数が表示される。

Fクラス アリサ・イリー・チエア・アミエーラ 日本史 23  
0点

Fクラス 吉井 明久 日本史 436点

何「？」？？？？！！！！

まさしく教室を揺らすかのような大音量の絶叫が響き渡った。もちろんBクラスの生徒だけでなくFクラスの生徒も絶叫した。

な、何だ吉井のあの点数！？

—ありえねえ！おかしきだら！？

「一体どこで見たんだ!?」

これにはアリサも驚いていた。

明ケさん……すこしてす！」

まあ得意科目だからね  
それじゃあ

そう言うと明久の召喚獣は手じかなくクラスの召喚獣に近づくと

打撃を擰えるはずの木刀はしかし相手の召喚獣を真つ二つに切り裂いた。

「何ぼけつとやつてんだ！ 数で押しつぶせ！」

やや焦った声で根本が指示を出し、それでBクラスの生徒は我に返り、明久になだれ込もうとするが、

「アタシを忘れてもらつては困りますね。」

そこにアリサが銃に変形した神機を乱射。弾幕でBクラスの召喚獸を足止めする。明久の召喚獸はその弾を器用に避けていく。

「 わて、それじゃあ…………本気で行くよ。」

そう言いつと明久の召喚獸の右手に光る黒い腕輪が更に光る。

「 プレーティー！」

明久の言葉と共に召喚獸は木刀を突きだす。

すると、そこから黒い巨大な恐竜のような顎が飛び出した。

その顎は目の前にいたBクラスの召喚獸を丸呑みにしてぐりゅぐりゅと噛み碎く。

「 な、なんだよ…………あれ。」

その光景に思わず再び全員の動きが止まる。

顎は食事が終わるとそのまま引つ込んだ。

「 わあ…………行くよ。」

明久が叫んだ瞬間、

Bクラスの召喚獸3体の首が飛んだ。

「 「 「 は? 」 」 」

またBクラスから間抜けな声が出た。

「僕の腕輪はプレデター。武器から巨大な顎を出して、それで攻撃。相手を喰らう事が出来たら一定時間攻撃力、スピードが上昇するバースト状態になれるんだよ。」

明久は余裕の表れか腕輪の事説明した。

「…………は！なにしてる…せつせとやつちまえ！」

根本が指示を飛ばすが、召喚獣が何かに喰われるという見慣れない異様な光景を見て全員が動けなかつた。

「来ないなら」つちから行くよ！」

「やあ、行きますよ…」

次の瞬間、明久の召喚獣はBクラスの団体に突っ込むと次々と召喚獣を切り裂き突き刺していく。

何とか攻撃しようとする者もいるがそれはアリサの銃撃で二どごとく撃ち抜かれていく。

時節その弾が明久の召喚獣に飛んでいくが明久の召喚獣はそれを器用に避けていく。

そして結果、Bクラス内を一人はあつといつ間に制圧した。残っているのは根本だけだ。

「ば、化け物！」

先ほどまでの強気な態度はどこへや。完全に逃げ腰だ。

「わて、あとは君だけだよ、根本君。」

「わいつかと召喚したらどうですか?」

二人の言葉、いや、その言葉に騙された、しかし、確かに怒りを感じ取り根本は察した。

「こいつらにはじつやつたつて勝てないと。

そして根本は負けると分かりながらも召喚獣を召喚。

その召喚獣を明久のプレーティーが一気に噛み碎いた。

しかしBクラス戦は終了した。

## 第17問 Bクラス戦パート5（後書き）

「ゴッドマイターなのにプレーティーが無いのはどうかと思ったので明久の腕輪にしました。

なぜ日本史があんな点数なのかはまた後程。  
では！

第1-8問 Bクラス戦後（前書き）

最近バカテスの更新がすいすいと行きます。

ゴッディーターもこのくらいで行けたらなあ・・・・・

まあ、とりあえずじつぞー！

## 第1-8問 Bクラス戦後

「二人とも今回は大活躍だったのう。」

「ほんと、いいところ取りしゃがつて。」

終戦後、Bクラスの教室にやつてきた秀吉と空は明久とアリサにそう話しかけた。

「いえ、アタシはほとんどビ役に立つてませんよ。明久さんが活躍したんですよ。」

「いや、アリサさんのおかげであそこまでできたんだからアリサさんもすこによ。」

対し、一人はお互に謙遜し、お互いを褒めていた。

「しかし驚いたぞ。明久があんな点数を取っていたなんて……。」

・

雄一は心底驚いたといつ風に言った。

「ま、日本史だけだよ。結構得意だから力を入れていたらあの点数になつたんだ。」

明久は肩をすくめて言つ。

「さて、それじゃあ嬉し恥ずかし戦後対談といふか。な、負け組代表?」

「…………」

雄一の田の前には床に座り込んでいる根本がいた。

「本来なら設備を明け渡してお前らには素敵な卓袱台をプレゼン  
トしたいところだが特別に免除してやらんでもない。」

その雄一の発言に周囲がざわざわと騒ぎ始める。

「面落ち着け。前にも言ったが俺たちの最終目標はAクラスだ。  
「I-Jはあくまで通過点だ。だからBクラスが条件を呑めば開放  
してやるつかと想つ。」

「そうだね。」

「I-Jはあくまで通過点だ。だからBクラスが条件を呑めば開放  
してやるつかと想つ。」

その言葉でFクラスの面子は納得したような表情をした。

「…………条件は何だ。」

力なく根本は聞く。

「条件?それはお前だよ。負け組代表さん。」

「俺、だと?」

「ああ、お前には散々好き勝手やってもらひたし、正直去年から  
田障りだつたんだよな。」

結構なことを言わされているが周囲のだれもフォローをしない。それだけのことを根本はやつてきたのだ。

「条件はこうだ。Aクラスに行つて試験戦争の準備ができると宣言して來い。それで設備については見逃してやってもいい。ただし、宣戦布告はするな。あくまでも戦争の意思と準備があるとだけ伝えるんだ。」

「…………それだけでいいのか？」

根本は疑うような視線を雄二に向ける。

「ああ。Bクラス代表がこれを着て言つた通りに行動してくれたら見逃そつ。」

そう言つて雄二が取り出したのは秀吉が着る予定だった女子の制服。

ちなみに本来は宣戦布告だけだつたのだが明久たちの根本の制服を手に入れるためにいれた工程だ。

「ば、馬鹿な事を言つた。この俺がそんなふざけたことを…………

・・！」

「Bクラス生徒全員で必ずやらせよう！」

「任せて！必ずやらせるから！」

「それだけで教室を守れるならやらない手はない！」

Bクラスの生徒は恐ろしいぐらいにやる気を出した。これだけでも根本がどういった行動をしてきたかがよくわかる。

「んじゃ、決定だな。」

「くつーみ、寄るなー変態ぐふうつー。」

「とりあえず黙らせました。」

「お、おひ。ありがとう。」

一瞬で代表に見切りをつけ、腹部に拳を打ち込んだBクラスの男子生徒の変わり身の早さに雄一も驚いている。

「では、着付けに移るか。明久、任せたぞ。」

「了解。」

そして明久はぐつたりと倒れている根本に近づくと制服を脱がせていく。

「へ、うう・・・・・・・・

根本がうめき声をだし目を覚ましそうになる。

すると明久は左手で右手をつかみ、右ひじを突きだすような体制をとるとそのままジャンプして体を横にし、落下の勢いと全体重を乗せ右ひじを根本に叩きこむ。

「ぐはあー?」

その威力に間違いなく根本は意識を失った。これでは宣戦布告が出来ないかもしかつたがその時は強制的に起こすだけだと明久は気にしないでいた。

「うーーん・・・・これどうあるんだね?」

男子と違う制服にやり方が分からず明久が頭をひねつていると、

「私がやつてあげるよ。」

Bクラスの女子一人がそう提案してきた。

「そりゃ悪いね。それじゃあ折角だし可愛くしてあげてよ。」

「それは無理。土台が腐っているから。」

その言葉に明久は苦笑とも心からの笑いとも取れる笑みを浮かべた。

「じゃ、よろしく。」

そう言って明久は根本の制服を手にその場を離れた。

そして根本の制服を「うわー」とあわつ、

「お、あつたあつた。」

目的の封筒を手に入れた。

「明久さん。どうでしたか。」

そこにアリサが加わった。

「うん。ちやんと取り返したよ。」

そうこうして明久は封筒を見せた。

「どうですか。よかったです……まさか明久さん、中身見てはこませんよね？」

「いや、見てないよ。私もそもそも見つけたんだよ。」

「へへへ、分かってますよ。」

やつらアリサは封筒を受け取った。

「これはアタシが瑞希に返しておきますね。」

「うん。お願い。僕はこれからこの制服を捨ててやるから。」

「もうですか、では。」

そう言ってアリサは教室に向かったが途中で何か思ひ出しだように振り返った。

「やつら明久さん。これからはアタシの事アリサって呼んでいいですよ。アタシは明久って呼びますから。」

「え? 何でまた . . . . . 」

「気分ですよ。それじゃあまた明日にでも、明久。」

「う、うん。分かつたよ、・・・・・・アリサ。」

そしてアリサは去つて行つた。

「えへへと瑞希の卓袱台は・・・・・・これですね。」

アリサは教室にて瑞希の卓袱台を見つけると封筒を置いた。

「さて、それじゃあ帰るとしますか。」

「アリサちゃん。」

アリサが振り返ると瑞希が立っていた。

「ああ、瑞希。大丈夫ですよ。ラブレターはキチンとあなたの卓袱台に返しました。」

• • • • • • •

「しかし、明久って本当にいい人ですよね。あそこまで人の為に頑張れて、怒ることができるなんて。」

「…………」

「いやはや、瑞希やなのはたちが好きになる気持ちが分かった気がします。」

「アリサちゃん、まさか…………！」

「ええ、好きですよ。…………友達としてね。」

アリサはまるでいたずらが成功したような笑みを浮かべた。

「まあラブレターもいいんですけど…………そつこいつ大切な想いはきちんと自分の言葉で表したほうがいいですよ。そのほうがきちんと伝わりますかね。」

「そうですか？」

「ええ、そうですよ。それじゃあアタシはこれで。」

そういふとアリサは教室を出て行った。

## 第1-8問 Bクラス戦後（後書き）

アリサに立つたフラグは友情フラグです。

最終的にははやとと同じように親友になりますね。

・・・・・・はやとは少し経緯が違いますが。

ではまたー

第19問 Aクラス戦前（前書き）

でもたのでこれもす。

ではどうだ！

## 第1-9問 Aクラス戦前

「まずはみんなに礼を言いたい。周りの連中には不可能だと言われていたにも関わらずここまで来れたのはでもないみんなの協力があつてのことだ。感謝している。」

点数補給のテストが終わったBクラス戦から2日後の朝。

明久たちはもうすぐお別れになる（予定）のFクラスで最後の作戦説明を受けていた。

「ゆ、雄一、どうしたのや。らしくないよ？」

「ていうか結構気持ち悪いぞ。」

「ああ、自分でもそう思つ。あと口ウタ。あとでシメる。だがこれは俺の偽らざる気持ちだ。ここまで来た以上絶対にAクラスにも勝ちたい。勝つて、生き残るには勉強すればいいってもんじゃない現実を教師どもに突き付けるんだ！」

「おおーっ！」

「そうだーっ！」

「勉強だけじゃねえんだーっ！」

最後の勝負を前にFクラスのメンバーの心が一つになつて來ていた。

「みんなありがと。さて、Aクラス戦だがこれは一騎討ちで決着をつけたいと思う。」

先日の昼食時に聞いたメンバー以外はかなり驚いたようで教室内がざわめきはじめた。

「どうしてだ？」

「誰と誰が一騎討ちをするんだ？」

「それで本当に勝てるのか？」

「落ち着いてくれみんな。今から説明をする。」

雄二がバンバンと机を叩いてみんなを静かにさせた。

「やるのは当然俺と翔子だ。」

「馬鹿の雄二が勝てるわけ（パシッ、ヒュン）ないじゃないか。」

「あぶねえっ！？」

明久に向かってカッターが投げつけられたが彼はそれをつかむと投げた本人一雄二に投げ返した。  
何とか本人は避けたが。

「ま、まあ。明久の言うとおり翔子は強い。まともにやりあえば勝ち目はないかもしね。」

まさか投げ返してくるとは思つていなかつたのか冷や汗をだらだ

「うと流す雄一であった。

「だがそれはDクラス戦もBクラス戦も同じだったり? まともにやつあえれば俺たちに勝ち目はなかつた。今回だつて同じだ。FクラスはAクラスが手に入れる。俺達の勝ちは揺るがない。」

最初は勝てないとthoughtいた試合戦争を勝利に導いてきた雄一の言葉を否定する人間はここにはもういない。

「俺を信じて任せてくれ。過去に神童をとまで言われた力を今みんなに見せてやる。」

「おおお――――――.」「

「さて、具体的な方法だが・・・・・一騎討ちではファイールドを限定するつもりだ。」

「ファイールド? なんの教科でやるつもりじゃ?」

「日本史だ。」

「日本史なの?」

「ただし内容を限定する。レベルは小学生程度、方式は100点満点の上限アリ。召喚獣ではなく純粹な点数勝負とする。」

「またずいぶんと変則的なルールやな。」

はやての言葉にみんなが頷いた。

「だけどそれだと同点だと延長戦ですよ？そうなつたら問題のレベルは上がりますし、いくら神童と言われてたとしてもブランクがある坂本さんでは厳しいのでは？」

「アリサの言つとおりだね。」

確かに普通の勝負に比べたら集中力切れと言つ形での勝ち目はあるがそれでも分が悪すぎる。

「おいおい、あまり俺を舐めるなよ～いくらなんでもそこまで運に頼り切つたやり方を作戦などと言つものか。」

「んじゃ、なにか？お前は霧島の集中力を乱す方法を知っているのか？」

「いいや。あいつなら集中何てしなくても小学生程度の問題なら何の問題もない。だが、ある問題が出ればあいつは確実に間違える。」

「

「ある問題？」

雄一の言葉になのはは首を傾げた。

「その問題は——大化の改新だ。」

「大化の改新だ？え～～と小学生レベルだと・・・・・・何年にやつたかつて感じか？」

「ビンゴだコウタ。お前の言つとおりその年号を問う問題が出たら俺達の勝ちだ。」

「大化の革新は645年だつたよね。」

「ああ、そんな明久でも間違えない問題だが翔子は間違いなく間違える。俺たちの勝ちだ。晴れてこの教室とはおさらばってわけだ。」

「雄一は自信満々に叫ぶ。そんな中でみんなが気になつていい」とが一つ。

「あの、坂本君。」

「ん?なんだ、姫路。」

「霧島さんとは、その・・・・仲がいいんですか?」

そこだ。さつきから雄一は霧島の事を「あいつ」とか「翔子」などと親しげに呼んでいた。つまり顔見知り以上であることは明らかだ。

「ああ。あいつとは幼なじみだ。」

「総員狙えええつ!」

「なつ!なぜ須川の号令でみんな急に上履きを構える!?.」

「黙れ男の敵!Aクラスの前にキサマを殺す!..」

「俺が一体何をした!?.」

ちなみにだが明久と空、コウタ、秀吉は参加していない。

「遺言はそれだけか？・・・・まつんだ横溝君。靴下はまだ早い。それは押さえつけた後口に押し込むものだ。」

「了解です。隊長。」

「すごいことになりましたね、明久。」

「そうだね、アリサ。でもあの霧島さんと幼なじみと言つからねえ。」

アリサの言葉に明久は苦笑した。

「あの、吉井君。」

「ん？なに、姫路さん。」

「吉井君は霧島さんが好みなんですか？」

「え？いや・・・美人とは思うけど・・・」

「・・・・・・・・・・」

「でも僕の好みじゃな・・・てつ、なんで姫路さんは僕に向かつて攻撃態勢を取るの！？それと、美波、どうして君は僕に向かつて教卓なんて危険な物を投げよつとしているの！？」

「ちょ、ちょっと二人とも落ち着いてください！」

「そりだよー！そもそもアキ君、好みじゃなって言ってたよー。」

アリサとフロイトが大慌てで一人を抑える。

「まあまあ。みんな落ち着くのじや。」

パンパンと秀吉が手を打つて場を取り持つ。

「そもそも冷静になつて考えてみるが良い。相手はあの霧島翔子じやぞ。？男である雄一に興味があるとは思えんじやろが。」

その言葉にみんなが思い出したような顔をした。

「…………おこちよつとまで秀吉。それってもしかして霧島は同性愛者つていうんじゃないだろつな？」

空がじくじくか不機嫌そうな顔で聞く。

「そんな噂が流れているんじや。」

その言葉に空はまあ、と深いため息を吐いた。

「何でこの学校にはきちんと恋愛をする奴がないんだ。」

「もういえば空は同性愛が大っ嫌いじやつたな。」

秀吉の言葉に空はじくじくと頷いた。

「とにかく、俺と翔子は幼なじみで、小さい頃に間違えて嘘を教えていたんだ。」

「いや、間違えて教えたなら教え直せよな。」

「ウタが呆れたように言った。

「あいつは一度覚えたことは忘れない。だから今学年トップの座にいる。俺はそれを利用してあいつに勝つ。そしたら俺たちの机はー」

「「システムディスクだ！」」「

Fクラスの言葉が一つになった。

が、

(ふう、確かにそれなら勝てそうだけど、悪いね雄一・・・・・・  
・・・・・・・・・・一騎討ちなんて絶対させないよ。)

明久は心の中で呟いた。

## 第19問 Aクラス戦前（後書き）

空の思考は自分と同じです。同性愛なんて滅んでしまえ！

あ、でも明久×秀吉は全然OKです。なぜかあの二人は行けと言  
える。  
・・・何故？

では次回！

## 第20問 Aクラス戦交渉（前書き）

今回の交渉は原作とは結構違います。

ではどういふんだ！

## 第20問 Aクラス戦交渉

「一騎討ち?」

「ああ。FクラスはAクラスは試召戦争としてAクラス代表に一騎討ちを申し込む。」

今回の宣戦布告は代表である雄一を筆頭にし、明久、空、アリサ、秀吉、ムツツリーーといつも首脳陣半分揃いで来ていた。

「うーん、何が狙いなの?」

Aクラスから交渉に出ているのは秀吉の双子の姉で空のもう一人の幼なじみ、木下優子だ。

「もちろん、俺達Fクラスの勝利が狙いだ。」

優子はなにか裏があるのかと訝しんでいる。

「面倒な試召戦争を手軽に終わらせることができるのにはありがたいけどね。だからと言つてわざわざリスクを冒す必要もないかな。」

「賢明だな。」

「ここまでは予想通りだ。ここからが交渉の本番になる。」

「とにかくAクラスとの試召戦争はどうだった?」

雄一は腕を組み、顎に手を当てながら訊く。

「時間は取られたけど、それだけよ？何の問題もなし。」

Aクラスが突如としてCクラスに勝負をかけた。その戦争は半日で決着がつき、今CクラスはDクラス程度の設備で授業を受けている。

「ていうか何でお前らがCクラスに宣戦布告を？」

雄一が今まで引っかかるつていたことを聞く。

「ああ。いくら点数が高くても操作がままならないんじゃ意味がないからそれほど強くもなく弱くもないCクラスを相手に練習したい方がいいって彼がね。」

そう言つて優子が指差したのは窓際に腕を組んで寄りかかっている褐色の肌に白髪の少年——ソーマ・シックザールだ。

「なるほどな。ところでBクラスとやりあつ氣はあるか？」

「Bクラスつて……昨日来ていたあの……」

「ああ。あれが代表をやつているBクラスだ。幸い宣戦布告はまだされていないようだがさてさて。どうなることやら。」

「でもBクラスはFクラスと戦争したから二ヶ月の準備期間を取らない限り試召戦争はできないはずだよね？」

試召戦争のルールに準備期間と言つのがある。

戦争に敗北したクラスは三ヶ月の準備期間を取らない限り自ら戦争を申し込むことは出来ないというものだ。

「知つていいだらう? 事情はどうあれ、対外的にはあの戦争は『和平交渉にて終結』つてことになつてゐる。規約には何の問題もない。・・・・BクラスだけじゃなくてDクラスもな。」

「・・・・それって脅迫?」

「人聞きが悪い。ただのお願いだよ。」

すると腕を組んでいたソーマが視線を明久に合わせた。その視線は語つている。

なんとか一騎討ちだけはやめろ、と。

その視線を受けた明久は小さくうなずくと、

「まあ・・・・木下さんが不審がるもの無理はないね。そこでさ物は提案なんだけどお互いに一人ずつ、計3人出して、1VS1の一騎討ちをして最初に2勝した方が勝ちつてのはどうかな?」

「なーおい明久! 何を勝手に・・・!」

「でもこの提案が却下されたら全面戦争になるかもしれないよ? だつたらちょっとでも勝ち目がある方に妥協した方がいいよ。」

明久の言葉に雄一は唸る。

「うへへへん・・・・いいわ。吉井君の案なら? んであげ

てもいいわよ。」「

優子はひとしきり悩むと明久の提案を呑んだ。

「本当か?」

「ええ。それなら」ひかりのリスクも結構小さく出来るしね。」

「…………はあ、仕方ない。けど、勝負する内容はひかりで決めさせてもいい。それくらいのハンデはあってもいいはずだ。」「

「えへへへん……」

ここでもた優子は悩み始めた。クラスを代表しての交渉だから慎重になつていい。

と、

「うわっ!」「

「…………受けてもいい。」「

「…………雄二の提案を受けてもいい。」「

現れたのはAクラス代表、霧島翔子。

「あれ? だいひょうにいの?」「

「…………その代り、条件がある。」「

「条件？」

「…………うん。負けた方は何でもいう事を一つ聞く。」

そう言いながら翔子は雄一の後ろにいる瑞希を踏みするようにじっくりと観察した。それを見た空はかなり深いため息を吐いた。

そこでムッシンリーは力チャ力チャとカメラを準備した。

「あの、土屋さん、何の準備をしてるんですか。ドン引きです。」

アリサが冷めた声でズバッと言つ。

「じゃ、じょう? 勝負内容は3つの内2つそつちに決めさせてあげる。あとの一つはこつちで決めさせて。」

「そうだな」「いいよ。」「な、明久! ?」

雄一の決定など待たず、明久は頷いた。

「おい、明久。お前さつきから何様のつもり? 「いいよね? 雄一? 」「つ……」

雄一は思わず明久に詰め寄つたが明久はにっこりと笑いながら雄一に聞く。しかしその田はあの獲物を見つけた獣のような田になつている。

「わ、分かつた。交渉成立だ。」

雄一はいくらか明久に押され氣味に承諾した。

「そうだな。10時からでいいか？」

一  
・  
・  
・  
・  
・  
分かつた。  
」

「うわ、やがて終った。

そして明久たちが教室に戻る際に明久の「かんこ」と答えた。

そして二人は視線で会話を

九月

当然でしょ。楽しみにしてたんだから語はも邪魔させないよ

## 第20問 Aクラス戦交渉（後書き）

さてはて一体明久の目的は。これはできれば連日投稿を実行したいです。目標は一巻終了！

ではまた次回！

## 第21問Aクラス戦1戦目（前書き）

今回で明久の目的が明らかになります。  
ではどうだ！

## 第21問 Aクラス戦1戦目

「では両名準備はいいですか?」

今回の戦争の立会人は結構お世話になつてゐる高橋先生だ。

「ああ。」

「…………問題ない。」

一騎討ちの会場はAクラスになつてゐる。いさりの方が広いからだ。

「では一人目の方どうぞ。」

「オレが行く。」

そう言つてAクラスから出でてきたのはソーマだ。

「やうか・・・ならこつちは」「明久、早く来い。」「急がさないでよ、ソーマ。」「て、明久!?」

いつのまにかFクラスからは明久が出ていた。

「言つとくけど雄一。何を言われてもこれは絶対に譲れないよ。」

そう言つて明久は雄一をギロリと睨みつける。

その眼光に思わず雄一もたじろぐ。

「わて・・・・・よつやくだね、ソーマ。」

「ああ、まつたくだ。」

二人のやり取りにAクラスもFクラスも首を傾げた。

「まつたく・・・いままで9回も戦つて全部引き分けだからやになつちやつよ。」

「同感だ・・・・・だが、今回で、」

「うん。決着をつけよう。」

そう言つて二人は構える。

「この10戦目で白黒はつきつける!」

「明久、お前が科目を選べ。」

「それじゃあ日本史でー。」

「「試験召喚ー。」」

日本史のフィールドが展開され、一人が叫ぶ。

幾何学的な魔法陣から出たのは学ランに木刀の明久の召喚獣にフードつきのコートを着、白く、召喚獣の2倍はありそうな巨大なノコギリを持ったソーマの召喚獣だ。

Aクラス ソーマ・シックザール VS Fクラス 吉井 明久

日本史 430点 VS 430点

「 「 「 何い――――――! ? ? 」 」

明久の点数を見たAクラスの生徒が絶叫した。

「アキ君と同じ点数・・・・・」

「でも、アキ君には操作技術がある。きっと大丈夫。」

点数を見てなのはは不安そうにつぶやくとフェイトが励ますよう  
に言つ。

「 「 「 ・・・・・・・・・・・・・・」 」

一方二人はお互ににらみ合つたまま動かない。まるでお互いが  
ほんのわずかでも動いたなら即座に攻撃を仕掛ける。そんな雰囲気  
だ。

まるで時が止まつたかのように沈黙が流れる。

と、次の瞬間。

「 「 ! 」 」

二人同時に動いた。

装備の重量が軽い明久の召喚獣が一足早くソーマの召喚獣の懷に

潜り込み、木刀を突きだす。

しかし、これをソーマの召喚獣は体をそらすことで避ける。さらに左手で木刀をつかんで明久の召喚獣の動きを止めると腹に蹴りを繰り出す。

それを明久の召喚獣は右手で防ぐ。そしてお返しと言わんばかりに蹴りを繰り出す。

ソーマの召喚獣は木刀をつかんでいた左手を放し、それで蹴りを受け止めると、右手でノコギリを横薙ぎに振う。刃は根本まであるため懐でも十分に切り裂ける。

明久の召喚獣はそれをしゃがんで避ける。足は別に固定されなかつたので即座に下ろしていた。でなければ避けられなかつた。

そしてそこから木刀を切り上げる狙いはソーマの召喚獣の頭。

それをソーマの召喚獣はバック転で避ける。

それを見た明久の召喚獣はいつたん距離を取る。

この間およそ10数秒。

その場にいた全員がポカンと口を開けた、高橋先生までも呆然としている。

するとまた一人の召喚獣は距離を詰める。

今度はソーマの召喚獣がノコギリの範囲に明久の召喚獣が入った

瞬間に両手でそれを振る。

明久の召喚獣はそれをジャンプして避けるとそのまま落下的勢いを乗せて木刀を振り下ろす。

ソーマの召喚獣はノコギリを蹴り上げて無理やり刀身を浮かし、それで防御する。

すると明久の召喚獣はノコギリに掴まる。ちょうど峰の部分なので問題ない。そこから逆上がりするような動作で蹴りを放つ。

さすがにこれには対処できず、蹴りはソーマの召喚獣の胸板を直撃した。

「ぐっ。」

するとソーマは胸板を押えながらひみいた。

さらに攻め込もうと明久の召喚獣は着地すると木刀を横薙ぎに振う。

それをソーマの召喚獣はノコギリの持ち手で防ぐ。更に右手を放すと明久の召喚獣の胸ぐらをつかんで引き寄せると頭突きをきます。

「ぐうう。」

明久は頭を押され、ふるふると振る。

その隙にソーマの召喚獣は距離を取る。

そしてお互に体制が整つと再び接近した。

雄一たちは目の前の光景が信じられなかつた。

召喚獣は操作にそれなりの技量を要する。

観察処分者の明久は人よりも召喚獣を操作してきた。だからその性能は高い。

だが、ソーマもかなり高く、更に明久のはさらに上がつてゐるよう見える。まるで召喚獣自身が自我を持つて戦つていると思つような錯覚を覚える。

明久の召喚獣はソーマの召喚獣の一撃を避けると首元に木刀を突きだす。

ソーマの召喚獣は首を大きく傾げて避けると蹴りを放つ。

が、明久の召喚獣はそれを右手で掴み、更に左手の木刀を捨て、両手でつかむとそのまま力任せに投げ飛ばす。

ソーマの召喚獣はそのまま誰かのリクライニングシートに激突する。

「て、おい！召喚獣がシートに触つたぞ！」

「てことはまさか・・・」

「」「「観察処分者ー?」」

Fクラスの声が重なる。

だがそれならあの操作技能も納得できる。

「ああ、そうさ。オレは観察処分者だ。」

叩きつけられた痛みに顔をしかめながらソーマは言った。

「3学期になつてな、そこから明久と観察処分者の仕事をこなしていた。」

「で、2人だから結構早く終わるんだよ。それでいくらか暇を持て余しているときに何回か模擬戦をやつたんだよ。」

明久も説明する。

「だがそのすべてが引き分けに終わったんだ。」

「そうしているうちにいつか絶対に決着をつけてやるつてお互に意気込んだんだ。でも、模擬戦で決着をつけるのも面白くない。」

「だから試召戦争でつけよつゝて話でまとまつたんだ。」

つまりだ。

二人はライバル関係であり、この戦いで決着をつける事を長く待ち望んでいたということだ。

ソーマがFクラスへの戦争をふっかけたのも明久の連絡でこのまでは下手したら勝負が3ヶ月もお預けになる可能性がでてきたか

やうこいとなる。

「そんなことが……」

アリサは呆然と呟いた。

「さて……ソーマ。 もつと楽しむ？ それとも……  
決める？」

そう言つて明久はプレトター、と呟いた。

次の瞬間、明久の召喚獣の木刀から黒い恐竜のよつた大顎が出てきた。

「ふつ、おもしれえ。 受けて立つてやるよ。」

そう言つてソーマはチャージクラッシュユ、と呟いた。

すると由いノコギリから黒いオーラが出るとそれは刀身を覆つて  
よつた巨大な刃になつた。

一人はお互に笑みを浮かべながらゆつくりと召喚獣を構えさせ  
る。

黒いオーラはまるで生きているように揺らめいて、プレトターは  
餓えたよつて顎をガチガチと動かす。

そして、

「…………」

一人同時に雄叫びを上げながら召喚獣を走らせる。

ノコギリはリーチが伸びている。だからソーマは範囲に入った瞬間振えれば勝てる。

しかしソーマの召喚獣は明久の召喚獣がノコギリの範囲に入つて  
もまだ振わない。

そして、明久の召喚獣がプレデターの顎を伸ばした瞬間、ソーマの召喚獣もノコギリを振る。

グチャリと音とザシユ、と言つ音が響いた。

明久とソーマはお互いに黙つて、召喚獣を見ている。

そこにはプレデターにより右半身を喰い飛ばされたソーマの召喚獸と、

ノコギリで首を切り落とされた明久の召喚獣が居た。

「君の・・・勝ち・・・だよ・・・ソー・・・マ」

そこで明久はフィードバックの激痛で意識を失った。

## 第21問 Aクラス戦1戦目（後書き）

今回の勝者はソーマになりました。

でもこれで一人の戦いを終わらせる気はありません。

ソーマの詳しいプロフィールは一巻終了後に。

ではまた！

## 第22問 Aクラス戦決着（前書き）

今回は一気に最後まで書きました。  
ではどうだ！

## 第22問 Aクラス戦決着

「う…………」

明久は首に痛みを覚えながらも意識を取り戻した。

「！アキ君！」

その声と共に突然何かが明久の顔に覆いかぶさった。

「！？ふがっ！もがっ！」

突然の事に明久はテンパリ、手をばたつかせる。じつはそれ以外にも理由はある。

その覆いかぶさったのが明久の口と鼻を器用に塞いでいるのだ。

呼吸ができない明久がさらにばたつくと、

「フェイトちゃん。アキ君が苦しがってるよ。ちょっと離れてあげたら。」

誰かの声が聞こえてきた。

「ああ、『めん、アキ君。』

その言葉と共に覆いかぶさっていたものが離れていき、明久は気道が確保されたことに安堵して、息を思い切り吸い込んで、周囲の状況を見た。

まず、空と「ウタの手によりFクラスのメンバー改めFFF団がのびていた。

アリサとはやでが殺氣全開の美波と瑞希を押えている。

明久の顔をなのはとフェイトが心配そうに覗き込んでいる。

明久がフェイトに膝枕されている。 ここ重要

「……………  
うええええええええええええ！…？？」

とんでもない絶叫音と共に明久はその場を転がる。

「あ、アキ君？どうしたの。」

突然の明久の行動にフェイトは目を丸くした。隣のなのはもだ。

「いや……せつまで自分が置かれていた状況に驚いて……  
・・・」

「ふつ、お前も隅に置けないな、明久。」

後ろからソーマに話しかけられて明久は振り返った。

そこには色の薄い髪をショートカットにした女の子に膝枕されているソーマがいた。

「……………わつきの言葉を一字一句すべてそのまま返すよ、

ソーマ。 「

「うるせー。俺も意識を失つてついさつと田を覚ましたばかりだ。  
しかもフィードバックの痛みであまりうまく動けねえんだよ。」

「なんで甘んじて受け入れてるの？」

「周囲の連中の田がなんか意外に動くなつて叫んでるよう見え  
んだよ。」

そう言われて明久はAクラスに田を向けると確かにビリとなくし  
ばらくそのままにしたら、てきな感じはする。たすがにソーマの言  
うような感じはしないが。

「大変だね。それはそつと君は？」

明久はソーマを膝枕している少女が気になつたようだ。

「あ、初めましてだね、吉井君。ボクは工藤愛子だよ。よろしく  
ね。」

「うんよろしく、工藤さん。」

「おい、いい加減にこれをやめろ。」

ソーマが不機嫌を隠さつともせず叫ぶ。

「うつせだからもううまいへりもうつむいたらへ  
「ふつじぱすだ。」

明久がニヤニヤとしているところへ、彼をギロツと睨みつけた。

「つてそれよりも試合戦争はどうなったの?」

明久は今何をやつているかを思い出し、周囲に聞く。

「アキ君達が意識を失つたから一回中断したの。でももう再開してもいいかな。」

なのは明久に答える。

「そう。じゃあお願いします。高橋先生。」

「分かりました。では一人目は出てきてください。」

「じゃあ僕が。」

Aクラスから出てきたのは今学年第2位の久保利光。

「よし、ここは姫路」「いや、俺が行くよ。」「は?」

雄二の言葉を遮つて出てきたのは空だ。

「おい空。お前勝つ自信があるのか?」

「とりあえず今回は気合を入れてきたから大丈夫だと思つけど···

···それ以前にあの状態の姫路を解放するのか?」

空が指差した先にいたのは今にも明久に飛びかかり殺陣の実演を

行い、そつたな瑞希と美波との二人を懸命に抑えていたアリサとはやて。

あ、今一人が最終手段の気絶行使したため一人は崩れ落ちた。

「…………お前に任せる。」

「アイアイ。」

空はそう言つて前に出た。

（さて……雄二の件があるから選択はできねえな。出来れば生物を選んでほしいな……）

「科目はどうしますか？」

「総合科目でお願いします。」

その言葉にFクラスに（生き残り）不安が走る。

「大丈夫なのか？ 空のやつ。」

「分からぬが……わしは空を信じる。」

「ウタの言葉に秀吉は不安げにしながらも信頼を込めて答える。

Aクラス 久保 利光 VS Fクラス 青葉 空

総合科目 3997点 VS 4000点

「おお、とこいつ言葉が漏れた。ギリギリで勝つ」事ができた。

「やるじゃないか、青葉君。」

「ふう、よかつた。それじゃあ…………一発で決めてやるよ。」

やつは呪文を使ひて召喚獣の武器を銃に切り替え、

「レバコブリッヂレイジ。」

呟いた。

次の瞬間、銃からとてつもなく巨大な紫の炎が螺旋を描きながら吐き出された。

それは軽く、召喚ファイアードを呑みこむほどの大さわだった。

「なー?」

久保は驚愕し、何とか避けようとするがそもそも召喚ファイアードを呑みこんでいるから意味がない。

そして久保の召喚獣はあっけなく炎に呑みこまれ、消し炭になつた。

「しょ、勝者、エクラス。」

高橋先生は田の前で起きたことに感つていた。

「よし、何とかなったな。」

そう言つて空は戻つた。

「おいおい何だよ空！スゲエ腕輪持つてんじゃねえかよー。」

その空にコウタが肩を組んでくる。

「そりは言つても点数の9割がた持つて行かれるから使い勝手が悪いんだよ。」

「にしたってあの範囲は反則じやぞ。」

秀吉も近寄つて話に加わる。

「まあ、そうだな。正直ぶつ放した俺も驚いてる。」

空は苦笑した。

「最後の一人、どうぞ。」

「…………はい。」

そして最後の勝負。Aクラスからは最強の霧島翔子。

Fクラスは、

「俺の出番だな。」

坂本雄一が出来る。

「教科はどうしますか?」

「教科は日本史。内容は小学生レベルで方式は百点満点の上限ありだ!」

雄二の言葉にAクラスはざよめきはじめる。

「上限あります?」

しかも小学生レベル。満点確定じゃないか。

「注意力と集中力の勝負になるんだ。」

「わかりました。そうなると問題を用意しなくてはいけませんね。少しこのまま待つてください。」

一度ノートパソコンを開じて高橋先生は教室を出ていく。

その背中を見送つて明久は雄二に話しかける。

「雄二、あとは任せたよ。」

「ああ。任せられた。」

二人はお互に手を握り合ひ。

「しつかり決めるんやで、坂本君。」

はやてがバンバンと雄一の背中を叩く。

「ああ、分かつてるよ。」

「坂本さん、ちゃんとやつてきたんでしょ? うね。」

アリサがじつと雄一を見る。実は作戦を聞いた日に念のために復讐をしておく約束にアリサは雄一に言っていた。

「ああ、大丈夫だ。」

「ならいいんです。頑張ってください。」

そう言つてアリサは下がつた。

「では最後の勝負、田本史を行います。参加者の霧島さんと坂本君は視聴覚室に来てください。」

戻ってきた高橋先生が一人に言つ。

「・・・・・はい。」

「じゃ、行つてくるか。」

一人はそろつて教室を出ていく。

「眞さんは」モニターを見ていてください。」

高橋先生が機械を操作すると壁のディスプレイに視聴覚室の様子が映し出される。

そして翔子、雄一の順に席に着く。

「では問題を配ります。制限時間は五十分。満点は100点です。」

日本史の飯田先生が問題用紙を裏返し、二人の机に置いた。

「不正行為は即失格になります。いいですね？」

「…………はい。」

「分かつているさ。」

「では初めてください。」

一人が問題用紙を解き始める。

「吉井君、いよいよですね。」

「そうだね、いよいよだね。」

瑞希は明久の隣に立っているが、明久は若干びくついている。ちなみにFクラスの面子は全員目を覚ましているがさすがに空気を読んで暴れたりはしていない。

「出ててくれよ、あの問題。」

「もし出でいなかつたら坂本は……」

「ま、延長戦で負けるだろうね。」

みんなが必死に祈つていた。

そして、

(　　)年 大化の革新

「あ・・・・・・！」

神はFクラスに手を差し伸べた。

「あ、アキ君！」

「うん。」

「これで俺達、」

「アタシたちの卓袱台が、」

「システムディスクに！」

Fクラス全員の声がそろつた。

「最下層の僕たちの歴史的な勝利だ！」

「おおおおおおつー！」

教室を揺るがすような歓喜の声。

日本史勝負　限定勝負　100点満点

Aクラス 霧島 翔子 97点 VS Fクラス 坂本 雄一  
53点

どうやら神様はいたずらが恐ろしく大好きのようだった。

## 第22問 Aクラス戦決着（後書き）

次回で一巻は終了です。

そのあとデータをはさみ、二巻へ。

データは誰? わあ・・・・誰でしょう。

では次回!

第23問 Aクラス戦後（前書き）

連日投稿と書いておきながら・・・・・・はある。

まあ書きあがりましたのでどうぞ！

## 第23問 Aクラス戦後

「一対一でAクラスの勝利です。」

「…………雄一私の勝ち。」

床に手をついている雄一に翔子が歩み寄る。

「…………殺せ。」

「良い覚悟だ、殺してやるー歯を食い縛れー」

「てめえにはこの世の地獄を見せてやるー」

「楽に死ねると思つなよー。」

明久、「ウタ君、空が犬歯をむき出しに吠える。

「吉井君、落ち着いてくださいー。」

「「ウタ君、とつあえず落ち着いてやー。」

「空も頭冷やしなわー。」

明久は瑞樹、「ウタははやて、空は優子が後ろから抑える。

「だいたい53点つてなんだよー。0点なら前の書き忘れとかも考えられるけど」の点数だとー」

「いかにも俺の全力だ。」

「！」の阿呆があ——！僕でも満点行けるぞー！」

「ていうかお前アリサに復習しつけって言われたろうがー！無視したんだなー！」

「あの時の大丈夫はそんなんしなくてもって意味だつたんですか！？ふざけないでください！」

アリサもかなりお冠だ。まあ、折角アドバイスしたのにそれを無視されたのなら当然かもしれない。

「みんな、とりあえず落ち着こうー！」ここで坂本君を痛めつけても結果は変わらないから！私もすっごく不服で不満だけどー！」

なのはが声を張り上げてみんなに叫うと全員しぶしぶ引き下がった。

「…………でも、危なかつた。雄一がしょせん小学校の問題だと油断していなければ負けてた。」

「言い訳はしねえ。」

その言葉に明久は本氣で股間を蹴り潰してやるひつかと思つた。

「…………とこで約束。」

「…………（カチヤカチヤ）」

翔子の言葉と共にムツツリーがカメラの準備を始める。空は割と本気で頭を抱える。

「分かっている。何でも言え。」

「…………それじゃあ——」

翔子は一度瑞希に視線を送り、再び雄一に戻し、小さく息を吸つて、

「…………雄一、私と付き合つて。」

と言つた。

その言葉にその場にいる全員の目が点になる。

「やつぱりな。お前、まだ諦めてなかつたのか。」

「…………私は諦めない。ずっと、雄一の事が好き。」

全員の思考能力がいまいち發揮していない中で空はつまぐ呑みこんだ。

翔子は小さい頃から雄一の事が好き。

「その話は何度も断つただろ？他の男と付き合つ氣はないのか？」

「…………私には雄一しかいない。他の人なんて、興味ない。」

「

異性に興味がないといったのは一途に雄一を思っていたから。瑞希を見ていたのは雄一の近くにいる異性が気になつたから。

そこで空の顔に喜色が浮かんだ。大嫌いな同性恋じゃないといふのがよほど嬉しいようだ。

「…………拒否権は？」

「…………ない。約束だから。今からデートに行く。」

「ぐあつー放せーやつぱーの約束は無かつたことだーーー

翔子は雄一の首根っこをつかんでそのまま教室を出て行つた。

あまりの出来事にみんな言葉が出ない中空だけ笑顔で手を振つていた。

「さて、Fクラスの皆。お遊びの時間は終わりだ。」

その声にみんなが振り返ると同時に生活指導の西村先生が立つていた。

「あれ？ 西村先生。僕らに何か用ですか？」

「ああ。今から我がFクラスの補習について説明しようと思つてな。」

「おめでとう。お前らは戦争に負けたおかげで福原先生から俺に

我がつていう所にFクラス全員ん？と思つた。

「おめでとう。お前らは戦争に負けたおかげで福原先生から俺に

担任に変わらうそだ。これから一念死にもの狂いで勉強できるぞ。」

「「「なにいつー?」」「」

クラスの男子全員が悲鳴を上げた。

「いいか。確かにお前らはよくやった。Fクラスがここまでくるとは思わなかつた。でもな。いくら学力が全てではないと言つても、人生を渡つていく上では強力な武器の一つなんだ。全てではないからといって、ないがしろにしていいものじゃない。」

西村先生の正論に全員ぐうの音も出ない。

「吉井。お前は坂本と共に念入りに監視してやる・・・・・と言いたいところだが最近は眞面目に勉強しているようだし特別に普通の監視にしてやる。」

「やつた――――――！」

明久はその場でジャンプして喜ぶ。その光景に幼なじみ3人組は苦笑する。

「とりあえず補習は明日から授業とは別に補習の時間を二時間ほど設けてやる。」

それを聞いた明久は喜ぶのやめると、ちよつと何か考えるように顎に手を添える。

そして携帯でどこかに電話をかけた。

「あ、もしもし、士郎さん？すいませんこんな時間に。ちょっと  
バイトの件で話が…………え？今から来てほしい？はあ……  
・・はい・・・・・はい・・・・・分かりました。それじゃあすぐに行  
きます。」

そう言つて明久が携帯を閉じると美波が歩み寄つてきた。

「さあ～～て、アキ。補習は明日からみたいだし、今日はクレー  
プでも食べに行きましょうか？」

「へ！？なにそれ！そんな約束した覚え……」

「だ、ダメです！吉井君は私と映画を観に行くんです！」

「ええっ！？姫路さん。そんな約束もした覚えがないよー…という  
か今日は絶対無理だよ！バイトが入ったんだから…」

「…へつ？」

明久の言葉に一人は目を丸くした。

「明久、バイトしてたのか？」

そこに「ウタが入つてきた。

「うん。仕送りだけじゃ、買えるゲーム限られるからね。さつき、  
平日はバイトできなくなるかもってむねを伝えようとなんでも急に  
従業員の人人が1人帰っちゃって至急来てほしいって言われたんだ。  
そういうわけだから…」

そう言つと明久は教室を走つて出て行つた。

「はあ、お父さんも人使いが荒いなあ。」

なのはは呆れたようにため息を吐いた。

そのなのはをはやてはまあまあと肩を叩く。

そんな中フエイトは、

(・・・・・よし、今度の週末。週末に誘おうー。)

と、その手に密かに握りしめた映画のチケットを持って決心して  
いた。

## 第23問 Aクラス戦後（後書き）

「」の後はアート編を書きたいと思います。

書き終わったたら、ゴッディーターに集中しようと迷ひので遅れます。

では！

## 第24問 テートで行つてみよひー（記書き）

すいません遅れて。

仕事が忙しくて・・・・・・いえすいません。本当にパソコンス  
ドラゴン2020にはまつてました。

あれはメチャクチャおもしろいですよー。ぜひ買つてやる」とを  
すすめします！

まあ宣伝はこねぐらいでビビッヂー

## 第24問 テートに行つてみよー！

週末の日曜日。

明久は映画館の前の広場にあるベンチに座っていた。

かれこれ10分ほど待つている。こういうのは男が先に待つてするのが常だ。

「…………ていうかなんで男が先に待つてなくちゃいけないんだろう……」

小さい頃から幼なじみ3人との待ち合わせの時は明久が先に来て待つていた。

一回に遅れたときには3人とも終始不機嫌だった。

「…………本当に女心つて分かんないなあ…………」

彼女たちはかれこれもう8年の付き合いだが未だに複雑な女心が分からない明久だった。

「やつてぽけ、としていると、

「アキく～～ん。」

手を振つて明久の待ち合わせ相手ーフェイトが駆けてきた。

「『』めんね、アキ君。待つた？」

「ううん。僕もさつき来たところだから大丈夫だよ。」

明久は笑顔で答える。今日はフェイトに誘われて、映画を見に来ていた。

「そう。それじゃあ早く行こ」

そう言つとフェイトは明久の手を握つて映画館に向かって走った。

「ちよ、ちよつとフェイト。そんな慌てなくとも。」

明久は引っ張られる形で入つていく。

そんな二人を遠方から見ている人影3つ。

「くっくっくっ。ええ雰囲気やな、あの二人」

はやは二ヤニヤを一切欠片も隠そつとしていない。

「なんていうか・・・・本当にアタシたちいい性格していますよね・・・・」

アリサははあ、と深いため息を吐いた。ちなみに今やっているのは典型的な覗きだ。

「じゃあ、なんでアリサちゃんはついてきたん?」

確かにアリサの言つことが本心ならついてこないといつことにする  
ればよかつただらう。ちなみには有志だつた。

「はあ・・・・なんていふか・・・・変な心配心が出てきま  
して・・・・」

アリサは頭を搔きながら何とも歯切れの悪い言葉を口にした。

「なんや、それ？」

はやてはその歯切れの悪さに首を傾げる。

せなみに

תְּהִלָּה וְהַלְלָה

ここにハンカチがあつたならすぐにでも噛みついて思いつきり引つ張りそうな雰囲気でいる三人目は明久と最も付き合いの長いのはである。

「なのせひやん。いのやましこのは分かるナビ、邪魔しちやあか  
んで? あくまでも今回は悪せや。」

「それむづかと思ひんですけどねえ・・・」

なのはをなだめるはやての言葉にアリサはやれやれと首を振る。

「で、いか覗くんなら覗くでさつわといか・・・」

そこでアリサの動きが止まつた。

アリサの行動に疑問を持ったのかはやてとなのはも田を向ける。そして止まつた。

その視線の先には瑞希と美波が居た。眼にすわほじ一殺氣を宿し、その手に釘バット（赤い染みつき）を持って。

「なのはちゃん、アリサちゃん！行くで！」

「「「うんー（了解ですー）」」

はやての言葉と共に3人は急いで飛び出す。

「ちよつとい、一人ともー！」

「？なのはにほやてにアリサ？何やつてんのよ。」

「それはこっちのセリフやー！その物騒なもんもって何してんねん！」

「何つて決まつてるじやないですかー！吉井君にお仕置き・・・」

「あれのどこお仕置きする必要があるんですかー！そもそもそんなの使つたらお仕置きじやなくて殺人ですかー！」

そもそもこの一人はどこから明久たちのデータの事を嗅ぎ付けたのだろう。確かに一人はそのことを言ってなかつたはずだ。ちなみにはやては偶然誘つてゐるといふのを見ていた。

「あつ、美波ちゃん！吉井君達いつの間にかいません！」

「いづれかやつられないわ！行くわよ、瑞希！」

「はい！」

次の瞬間一人は走り去つていた。

「はやつー？」

「驚いてる場合ぢやない早く追わなあ！」

「急ぎましょーじやないと明久が！」

3人も急いで映画館に向かつて走つた。

「それでフロイト、何が見たいの？」

映画館に入つた明久はフェイトに聞く。

「うん、最近話題の恋愛映画……」

そこで突然フェイトの動きが止まつた。

「どうした……の……」

明久が同じ方向に目を向けて、同じように固まつた。そこには、

「……雄一、何見たい？」

「…………俺の願いは……叶えられるのか？」

翔子と木目が渋い木の手錠を付けた雄一がいた。ちなみにその手錠からは鎖が伸び、翔子が持つていた。

「え…………と…………雄一…………BASARAの黒田

○兵衛の「スプレ?」

「それだつたらどんなに楽か…………」

雄一は恐ろしくげんなりとした様子で呟いた。

「…………じゃあ、地獄の默示録完全版。」

「おい! それ4時間8分もあるじゃねえか!」

「…………2回見る。」

「8時間16分も座つてられるか！」

そう言つて雄一は逃げようとするが、

「逃がさない・・・・・座るのが無理だつたら寝てもいい・・・

・ノチノチ

翔子はどこからともなくスタンガンを取り出し、雄一に押し付けて氣絶させ、そのまま引きずつてカウンターに向かう。

「學生一人分。」

「はい。学生一人。また氣絶して無駄な学生一人ですね。」

そのような光景を目にしても店員は営業スマイルを崩さない。どうかまたといつことは前、恐らく試合戦争後のデータの時もだつたのだろう。

そのまま映画館の中に消えていく一人。

あまりの光景に明久とフェイトは啞然としていた。と、

「なんか・・・・・すごい光景でしたね。」

聞き覚えのある声に振り返ると、そこには明久より色の濃い茶髪で癖つ毛で女の子っぽい顔をした少年がいた。

「あれ？ レン、 こんなところで何してるの？」

「何つて…… 映画見に来たに決まってるでしょ。」

レンは呆れたように言った。

彼は函館レン。 明久たちと同じ文理学園の2年生で翠屋でアルバイトしている少年だ。

「そっちは………… いえ、 变な詮索は野暮ですね。」

レンはニヤニヤしながら囁く。

「ちゅうとレン……」

「いえいえ、 僕の事は気にせずやれ、 もういいや。」

顔を赤くするフロイトをしつこいレンはほれぼれと促す。

「つー………… もう、 行こ、 アキ君。」

「う、 うん。」

フロイトは思わず怒鳴りそうになるが時間も無いため明久を連れて映画館に入つていく。

それをレンはニヤニヤと見ていた。

一方なのはたちはといつと、

「へえ～～～あの子男の子なんですか。」

「そりなんだ。私も初めて会った時は驚いたよ。」

「私は未だにボクつ娘なんじやないかとうたがつてゐるけどな。」

何とか瑞希、美波を捕まえ、再び覗きを実行していた。

あの一人は変に暴れないようにしつかりとなのはは瑞希のアリサ  
が美波の服をつかんでいた。

掴んでいたはずだが・・・・・

「あれ！？あれ、瑞希と美波じやないですか！？」

「うそ！？ちゃんと服を・・・・あれ！？いつのまにか抜けられ  
てる！」

そう、いつのまにか一人はなのはとアリサの拘束から抜け出して  
いた。

「何その高度な技術！て言つかあかん！早くしないと・・・・

そこではやめて止まつた。

その視線の先ではレンが2人と何か話していた。

「さて、それじゃあ僕も映画でも」「ちよつと待つて（へださい）

」「ん？」

レンが振り返るとそこには阿修・・・瑞希と美波が居た。

「あ、あの・・・・・僕に何か・・・・・

あまりの殺氣にレンはかなりビクつく。

「あんたアキと随分仲良しそうだったけど・・・・・

「誰なんですか？」

「え、えっと明久さんと同じといひでバイトしてこりの面倒レンです。いつも見えて男ですので・・・・・」

「そり・・・・・といひでアキとフロイトは何の映画を見に行つたの？」

「へ? そんなの聞いてどうあるんですか?」

「決まりますー吉井類がフェイトちゃんに変な事をしないように見張るんですー！」

見張るなら釘バットはいるだろ?とレンは思った。

そして同時にこの人たちを明久に合わせたら間違いなく明久は殺されるとも思った。

（……………そつだ。）「え~~~~~ですね……………  
・確かに…………地獄の默示録を2回見るって言つてましたかね  
え…………」

「地獄の默示録ね！ありがとうー！」

「そんな長い時間暗い所に…………やつぱりフェイトちゃんを襲うつもりだったんですね！許しませんー！」

そのまま一人はカウンターに行つてチケット購入。見当違いのホールへ急行した。

「……………バカで良かつた。」

レンがふうとため息を吐くと、

「「レン君ー。」」

なのは、はやて、アリサが駆け寄ってきた。

「あ、はやてさん、なのはさん。それと…………そちらの方は初

めましてですね。僕は雨宮レンです。男ですのでよろしく。

「あ、どうも。アリサ・イローーチア・アリーナです……。  
じゃありません!」

「レン君ー。わざわざいたピンクの髪の子とポーラーテールの髪の子ども  
の映画に入った!?」

なのはの言葉にレンはああ、やつぱりかあと思った。明久をめぐ  
る女性関係は彼も知つている。

「地獄の黙示録です。」

「へへへへっ?」「へ

「もちろん明久さん達は別の映画ですよ。まあ、足止めですよ。  
足止め。これなら大丈夫でしょう?」

「ま、まあそうだね。」

「やるなあ、レン君。」

「あれ、4時間8分もありますよ……。確實じゃないですか。」

「まあね。では僕も映画を見たいんでこれで。」

そう言つてレンは頭を下げるときウンターに行つた。

## 第24問 テートに行ってみよう!（後書き）

はい、これであのバカ二人は足止めです。

あの二人は居ないことに気付かず最後まで見そな気がする。

では次回!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1971t/>

---

バカとリリカルとゴッドイーター

2011年11月26日20時46分発行